

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2022年12月15日
【事業年度】	第27期（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）
【会社名】	株式会社メディネット
【英訳名】	MEDINET Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 久布白 兼直
【本店の所在の場所】	東京都品川区勝島一丁目5番21号 (同所は登記上の本店所在地であり、実際の業務は「最寄りの連絡場所」で行っております。)
【電話番号】	該当事項はありません。
【事務連絡者氏名】	該当事項はありません。
【最寄りの連絡場所】	東京都大田区平和島六丁目1番1号
【電話番号】	(03)6631-1201(代表)
【事務連絡者氏名】	取締役経営管理部長 落合 雅三
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第23期	第24期	第25期	第26期	第27期
決算年月	2018年9月	2019年9月	2020年9月	2021年9月	2022年9月
売上高 (千円)	998,278	-	-	-	-
経常損失 () (千円)	2,711,641	-	-	-	-
親会社株主に帰属する当期純損失 () (千円)	3,048,545	-	-	-	-
包括利益 (千円)	3,339,938	-	-	-	-
純資産額 (千円)	3,313,101	-	-	-	-
総資産額 (千円)	3,937,155	-	-	-	-
1株当たり純資産額 (円)	27.56	-	-	-	-
1株当たり当期純損失 () (円)	26.77	-	-	-	-
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	82.8	-	-	-	-
自己資本利益率 (%)	70.0	-	-	-	-
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	2,499,487	-	-	-	-
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	154,386	-	-	-	-
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	1,110,214	-	-	-	-
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	2,201,767	-	-	-	-
従業員数 (人)	92	-	-	-	-
(外、平均臨時雇用者数)	(30)	(-)	(-)	(-)	(-)

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

2. 株価収益率については、親会社株主に帰属する当期純損失であるため記載しておりません。

3. 従業員数には、契約医療機関への出向者を含めております。

4. 第24期より連結財務諸表を作成しておりませんので、第24期以降の連結経営指標等は記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第23期	第24期	第25期	第26期	第27期
決算年月	2018年9月	2019年9月	2020年9月	2021年9月	2022年9月
売上高 (千円)	957,820	1,059,021	783,035	683,033	633,672
経常損失 () (千円)	2,700,297	995,494	836,659	870,726	1,314,262
当期純損失 () (千円)	3,127,969	795,307	842,013	843,396	1,254,092
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	-	-	-	-	-
資本金 (千円)	7,362,829	7,439,545	8,849,677	5,082,073	5,892,020
発行済株式総数 (株)	118,230,423	120,875,423	160,830,423	178,750,423	211,730,423
純資産額 (千円)	3,250,501	2,590,458	4,806,576	4,902,726	5,511,924
総資産額 (千円)	3,864,565	3,084,178	5,249,563	5,377,672	6,078,061
1株当たり純資産額 (円)	27.03	21.10	29.60	27.31	26.03
1株当たり配当額 (円)	-	-	-	-	-
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純損失 (円)	27.47	6.71	6.19	4.88	6.33
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	82.7	82.7	90.7	90.8	90.7
自己資本利益率 (%)	72.2	27.7	23.0	17.5	24.1
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	-
配当性向 (%)	-	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	938,444	632,923	974,695	1,161,202
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	50,318	86,200	344,245	20,227
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	90,076	2,786,820	1,082,324	1,584,835
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	-	1,403,718	3,643,814	4,095,689	4,499,095
従業員数 (人)	92	76	78	83	96
(外、平均臨時雇用者数)	(30)	(17)	(17)	(19)	(18)
株主総利回り (%)	67.2	47.7	69.5	54.7	76.6
(比較指標：配当込みTOPIX)	(110.8)	(99.3)	(104.2)	(132.9)	(123.4)
最高株価 (円)	173	101	179	127	110
最低株価 (円)	69	49	33	51	39

- (注) 1. 持分法を適用した場合の投資利益については、第23期は連結財務諸表を作成していたため、第24期は関係会社は存在するものの重要性が乏しいため、また第25期以降は関係会社がないため、記載しておりません。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
3. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第27期の期首から適用しており、第27期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。
4. 株価収益率については、当期純損失であるため記載しておりません。

5. 従業員数には、契約医療機関への出向者を含めております。
6. 最高・最低株価は、2022年4月1日までは東京証券取引所マザーズ、2022年4月4日以降は東京証券取引所グロース市場における株価を記載しております。
7. 第23期については連結財務諸表を作成していたため、営業活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー、財務活動によるキャッシュ・フロー並びに現金及び現金同等物の期末残高は記載しておりません。

2【沿革】

年月	事項
1995年10月	予防医学に基づく新たな医療サービスの提供を目的として、東京都港区に株式会社メディネット（資本金1,000万円）を設立
1999年4月	東京都世田谷区に分子免疫学研究所を開設、契約医療機関向けに細胞培養加工施設を設置し、免疫細胞療法総合支援サービスを開始
2000年12月	東京都港区に本社を移転
2001年8月	厚生労働省による新事業創出促進法に基づく「新事業分野開拓の実施に関する計画」の認定
10月	神奈川県横浜市港北区に本社を移転、契約医療機関向けに細胞培養加工施設（新横浜CPC1）を設置し、免疫細胞療法総合支援サービスを開始
2002年4月	神奈川県横浜市港北区に先端医学研究所を開設
7月	契約医療機関向けに細胞培養加工施設（新横浜CPC2）を増設
2003年5月	東京都世田谷区に研究開発センターを新設、分子免疫学研究所と先端医学研究所を同センター内に移転すると共に、先端医学研究所を「分子遺伝学研究所」に改称
6月	大阪府吹田市に大阪事業所を開設、契約医療機関向けに細胞培養加工施設（大阪CPC）を設置し、免疫細胞療法総合支援サービスを開始
10月	福岡県福岡市博多区に福岡事業所を開設、契約医療機関向けに細胞培養加工施設（福岡CPC）を設置し、免疫細胞療法総合支援サービスを開始 東京証券取引所マザーズ市場へ株式を上場（2003年10月8日付）
2004年3月	細胞医療支援事業においてIS09001の認証を取得
5月	「分子免疫学研究所」と「分子遺伝学研究所」を統合し、研究開発センターの名称を「先端医科学研究所」に改称
8月	日本初の治療用がん組織保管サービスである「自己がん組織バンク」サービスを開始
2007年2月	東京大学医学部附属病院の22世紀医療センター内に開設された「免疫細胞治療学講座（免疫細胞治療部門）」向けに細胞培養加工施設（東大22世紀医療センターCPC）を設置し、免疫細胞療法総合支援サービスを開始
6月	独立行政法人国立病院機構大阪医療センターと同センターにおける免疫細胞療法の実施に対する技術支援を行うライセンス契約を締結
11月	研究開発施設を東京都世田谷区の先端医科学研究所に統合し、名称を「研究開発センター」に改称
2008年1月	100%子会社として株式会社医業経営研究所を設立
2011年7月	九州大学先端医療イノベーションセンター向けに免疫細胞療法総合支援サービスを開始
2013年12月	100%子会社として株式会社メドセルを設立
2015年5月	細胞加工事業の拡大を目指して、東京都品川区に再生・細胞医療用の細胞培養加工施設（品川CPF）を建設し、特定細胞加工物製造許可を取得
2016年6月	研究開発部門（研究開発センター）を本社に移転
2017年8月	福岡細胞培養加工施設（福岡CPC）を新横浜細胞培養加工施設（新横浜CPC）に統合
10月	新横浜細胞培養加工施設（新横浜CPC）及び大阪細胞培養加工施設（大阪CPC）の特定細胞加工物製造許可を取得
2018年8月	大阪細胞培養加工施設（大阪CPC）を新横浜細胞培養加工施設（新横浜CPC）に統合 100%子会社であった株式会社医業経営研究所及び株式会社メドセルと吸収合併契約を締結（2018年10月1日合併効力発生）
2019年4月	新横浜細胞培養加工施設（新横浜CPC）を品川細胞培養加工施設（品川CPF）に統合
6月	本社を東京都大田区に移転
2020年1月	品川細胞培養加工施設（品川CPF）の再生医療等製品製造業許可を取得
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所マザーズ市場からグロース市場に移行

3【事業の内容】

当社は、「常に本質を究め、誠実性と公正性をもって真の社会的付加価値を創造する」という経営理念の下、「次世代の医療を支える革新的な技術及びサービスを迅速かつ効率的に社会に提供し続ける」ことにより、人々の健康と“Quality of Life（生活の質）”の向上に資することを使命として、細胞加工業及び再生医療等製品事業を展開しております。

当社の当事業年度末における事業内容は次のとおりであります。

なお、次の2部門は「第5 経理の状況 1 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項(セグメント情報等)」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

細胞加工業

細胞加工業では、医療機関向けの特定細胞加工物の製造（特定細胞加工物製造業）をはじめ、企業、大学、医療機関/研究機関等から、臨床用の細胞加工及び治験用の細胞加工物製造の受託（CDMO事業）や、再生・細胞医療のバリューチェーンを収益化し、細胞培養加工施設の運営管理、細胞加工技術者の派遣・教育システムの提供等（バリューチェーン事業）を行っております。

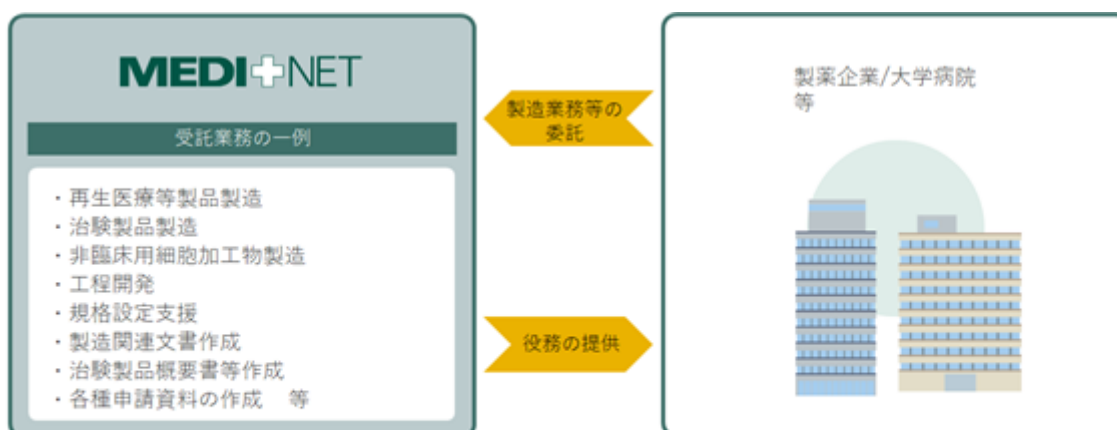
細胞加工業のビジネスモデルを図示すると、以下のとおりであります。

）特定細胞加工物製造業



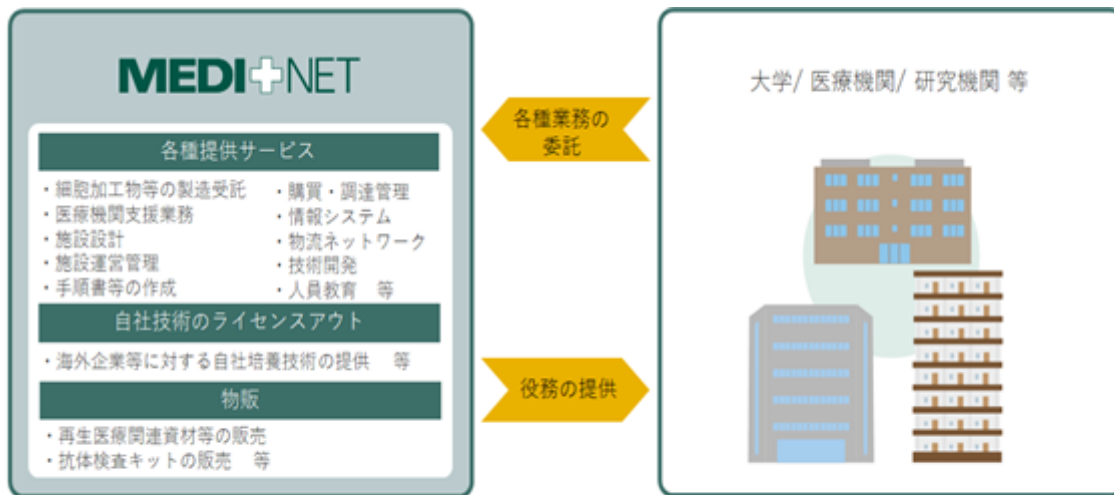
- 医療機関で採取された患者様の細胞から、医療機関の委託に基づき、再生・細胞医療で用いる治療用の細胞(特定細胞加工物)を製造し、製造件数に応じて製造委託料を受領

）CDMO事業



- 再生医療等製品の治験製品および承認取得後の製品の製造受託をはじめ、実用化に係る各種業務を受託し、各種役務に応じた委託料を受領

）バリューチェーン事業



■細胞加工関連プロセスから派生する技術・ノウハウ等を提供し、対価を受領

再生医療等製品事業

再生医療等製品事業では、当社で行う研究開発のみならず、これまで継続的に行ってきた大学等との共同研究を通じて、再生医療等製品の製造販売承認を取得してまいります。同時に、国内外で行われている再生医療等製品の開発動向にも注目し、国内外の有望な技術・物資等を持つ企業等とのアライアンスにより、パイプラインの拡充を視野に入れた活動も行っております。

再生医療等製品事業のビジネスモデルを図示すると、以下のとおりであります。

再生医療等製品事業



■製薬企業へライセンスアウトを行った場合、開発ステージに応じた対価を受領
(契約一時金、マイルストーン収入等)

■ライセンスアウトしたパイプラインが製造販売承認を取得した場合、売上高に応じたロイヤルティを受領

「再生医療等製品事業」は再生医療等製品の開発段階にあるため、事業収益は発生しておりません。

4【関係会社の状況】

該当事項はありません。

5【従業員の状況】

(1) 提出会社の状況

2022年9月30日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
96 (18)	38.6	8.5	5,378,438

セグメントの名称	従業員数(人)
細胞加工業	65 (10)
再生医療等製品事業	19 (4)
全社(共通)	12 (4)
合計	96 (18)

- (注) 1. 従業員数には、契約医療機関への出向者1名を含めております。臨時雇用者数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含めております。
3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門等に所属しているものであります。

(2) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

(1) 経営方針

当社は、常に本質を究め、誠実性と公正性をもって真の社会的付加価値を創造するという経営理念の下、次世代の医療を支える革新的な技術及びサービスを迅速かつ効率的に社会に提供することにより、人々の健康と“Quality of Life(生活の質)”の向上に資することを使命として事業を展開しており、独自の研究開発、技術開発はもとより、国内外の医療機関や研究機関、企業その他との広範で柔軟なコラボレーションを積極的に推進することにより、事業の成長スピードを早め、より大きな事業機会の創出を図ることを経営の基本方針とします。

(2) 経営環境

2014年11月に再生・細胞医療を、より安全により早く患者に届けることができる、新たな2つの法的枠組みが設けられました。1つは「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」(以下、「再生医療等安全性確保法」)で、これまでは医療機関のみが許されていた治療に用いる細胞加工について、特定細胞加工物製造許可を取得した企業が細胞加工を受託できるようになりました。もう1つは「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」(以下、「医薬品医療機器等法」)で、従来の医薬品、医療機器とは別に「再生医療等製品」という新たなカテゴリーが設けられ、安全性が確保され効果が推定されれば、条件・期限付きで早期に承認される仕組みが導入されました。これらの新たな法的枠組みの下、当社は、新たなビジネス展開による事業拡大に向けた取り組みを進めております。

当社は、1999年から免疫細胞治療に用いる細胞の加工のほか、免疫細胞治療を実施する際に必要となる細胞培養加工施設の設置・運営管理を始め、細胞加工技術者、信頼性保証、技術開発などを医療機関に対して提供してまいりました。これまで経験してきた細胞加工件数は約19.2万件に及びます。また、国家戦略特区に位置する羽田空港近隣に細胞培養加工施設(以下、「品川CPF」)を保有しております。品川CPFは、2015年5月に特定細胞加工物製造許可を取得し、続いて2020年1月には再生医療等製品製造業許可を取得したことにより、特定細胞加工物の開発・製造受託と再生医療等製品の開発から商業生産まで、様々な細胞や組織の加工を行うことが可能な施設となっております。当社は、これらを当社の競合他社に対する競争優位性と考えております。

現在はこれらの当社の強みを生かすことができる主力事業の特定細胞加工物の製造受託において、主に医療機関等から免疫細胞治療に用いる細胞の加工を受託しております。今後はさらに、体細胞や体性幹細胞を用いた細胞などの加工を受託するとともに、バリューチェーン事業において、研究から開発、製造、マーケティングといった再生・細胞医療のバリューチェーンをワンストップで実現するトータルソリューションを提供することで、お客様がスムーズに再生・細胞医療を実施できるよう、様々な支援を行ってまいります。これらに加えて、CDMO事業において、企業から再生医療等製品や治験製品の開発・製造受託を図ってまいります。

当社を取り巻く経営環境は、新型コロナウイルス感染症への対応が進み、経済活動が持ち直して、穏やかな回復が見られる一方、急激な円安の進行や資源・エネルギー価格の高騰などがあり、依然として先行きは不透明な状況が続くものと想定されます。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社は、「再生医療等安全性確保法」及び「医薬品医療機器等法」による新たな規制環境の変化を捉え、これまで事業の中核をなしていた医療機関向けの特定細胞加工物の製造に加えて、企業等に向けた細胞加工業への展開等、新たなビジネス領域を拡大することで、早期の黒字化を目指してまいります。さらに、再生医療等製品の開発を加速させ、製造販売承認を取得することで、飛躍的な成長を目指してまいります。

中長期的には、当社は、「VISION2030」をビジョンに掲げ、その達成のための経営方針に基づき、事業を推し進めてまいります。

VISION2030

メディネットは、病気やけがを治すとともに、健康維持・改善に寄与することにより、Well-Being社会(“身体的・精神的・社会的に良好な状態にある社会”)に貢献するHealthcare Innovating Companyを目指す。

「VISION2030」を達成するための経営方針

1. メディネットの強み・経験を最大限に活かした成長
2. 環境の変化に対応し、継続的成長に向けた変革の推進
3. 会社基盤の強化

(4) 優先的に対処すべき会社の課題

「(3) 中長期的な会社の経営戦略」を踏まえ、当社が対処すべき特に重要な課題は、以下のとおりであります。

1. 経営方針「メディネットの強み・経験を最大限に活かした成長」における課題
特定細胞加工物製造受託の拡大
CDMO事業の基盤強化
再生医療等製品の開発の加速化と新規シーズの育成
2. 経営方針「環境の変化に対応し、継続的成長に向けた変革の推進」における課題
当社事業の収益性及び生産性の向上
当社事業へのシナジー効果、VISIONに合致する新規事業の育成
3. 経営方針「会社基盤の強化」における課題
「先を見据え、自ら一步先の考動ができる」人財への活性化
DX実現に向けた社内環境整備の加速化

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が提出会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。また、当社は必ずしも事業上のリスクとは考えていない事項についても、投資家の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資家に対する情報開示の観点から積極的に開示しております。

なお、当社は、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応等に努める方針であります。投資判断は、以下の記載事項及び本項以外の記載事項を慎重に検討した上で行われる必要があります。以下の記載は、当社に関連するリスクを全て網羅するものではないことにご留意ください。

なお、文中の将来に関する事項は、当有価証券報告書提出日現在において当社が判断したものであります。

価格に係るリスク

免疫細胞治療は先進的な医療技術であるため、一般的な治療として行われている外科療法、放射線療法、化学療法（抗がん剤治療等）等のように、現時点では保険診療の対象とはなっておらず、当社契約医療機関における免疫細胞治療1クールの治療費総額は、医師が適切と判断する治療の種類等にもよりますが、およそ200万円であります。当社は、免疫細胞治療に用いる細胞加工物の製造の対価として細胞加工の種類と回数に基づく変動課金制による加工料を頂いておりますが、その金額は当該契約医療機関の患者が負担する治療費に依存します。また、免疫細胞治療は先端医療であるがゆえに、医師の治療方法に対する考え方に相違があること、関連技術が急速な進歩過程にあること等の理由により、標準的な価格水準が定まっていません。今後、免疫細胞治療の治療費水準の変化等に伴い、加工料の見直しがなされた場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。2014年11月に「再生医療等安全性確保法」が施行され、免疫細胞治療は医療機関により適切に提供されることになりましたが、今後、本法令を遵守した運用の中で新たな対応策が求められる可能性も考えられることから、細胞加工物の製造の対価そのものの形態が変更される可能性があります。

今後、再生医療分野の産業化に向けた環境が整備され、多くの新規企業による市場参入及び競争激化に伴い、特定細胞加工物の製造の対価及び新たなビジネスの価格競争が生じた場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

市場動向に関するリスク

再生医療は、未だ日進月歩の新技术であるため、大学や研究機関並びに製薬会社等多くの医療関係者により、様々な技術や治療方法が開発、発表されております。その中には、不治の病を改善する画期的な新薬もありますが、新技术であるがゆえに、想定しえない甚大な副作用を起こすリスクもあります。甚大な副作用等の損害が発生した場合、再生医療という新技术に対してイメージの悪化による患者の減少が見込まれます。

業界イメージの悪化による患者数の減少は当社の業績に影響を与える可能性があります。

競合及び競合他社に係るリスク

(1)再生医療に係る分野への企業参入状況

「再生医療等安全性確保法」及び「医薬品医療機器等法」により再生医療に関して、明確な法的枠組みが整い、複数の企業が、当社のビジネスと類似したモデルで免疫細胞治療を含む再生医療に係る分野に参入しております。再生医療に関連する画期的な新技术や技術革新の進展により、再生医療市場の拡大が見込まれております。競争が激化して、当社の競争優位が保てなくなる場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(2)バイオテクノロジーの進歩に伴う競合

当社の属するバイオテクノロジー業界は急速に変化・拡大しておりますが、特にがん治療分野では新しい治療薬の研究開発が進んでおります。大手製薬企業が、がんをターゲットとして開発を進める免疫チェックポイント阻害薬、分子標的薬、遺伝子治療薬等、保険適用される画期的な新薬が開発、販売されております。仮に免疫細胞治療との併用とは関連なく、治療効果の高い医薬品が開発された場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。また、当社においては、積極的な研究開発投資により、常に最先端の技術への対応、業界に先駆けた新技術の開発等に注力しておりますが、当該技術革新への対応が遅れた場合、あるいは、現在の主力事業の対象となっていない免疫細胞治療に代わる画期的な治療法が開発された場合等には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

品質管理体制に係るリスク

当社は、「再生医療等安全性確保法」及び「医薬品医療機器等法」の下、これまで培った経験・知見、再生医療分野の事業ノウハウを用いて効率的に適合させ、信頼ある細胞加工業・再生医療等製品事業を推進しております。現在、当社では以下のような品質管理体制を整備・運用しております。

(1)細胞培養加工施設

当社の品川C P Fは、「再生医療等安全性確保法」に基づく特定細胞加工物製造事業者許可、並びに「医薬品医療機器等法」に基づく再生医療等製品製造業許可を取得しており、医療機関、企業等からの細胞加工を受託する体制を整備しております。

しかしながら、人材の流出や人為的過失が発生し、正しく運用できなくなった場合、これらの許可が取り消される可能性があり、許可が取り消された場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(2)細胞加工技術者の育成・確保

当社では、これまでの経験に裏付けられた細胞加工を適正かつ安全に行うための細胞加工技術者の育成システムを有しており、技術者の育成及び優秀な人材の確保に努めております。しかしながら、新規参入が相次ぎ、業界内で人材の争奪戦が発生した場合、優秀な人材の確保が困難になる可能性があります。人材の流出や確保が難しくなった場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(3)製造管理

細胞加工の工程においては、標準業務手順書（SOP）に基づいて実施することにより品質確保に努めておりますが、人的な過失、予期せぬ装置の故障等により品質基準を満たしていない加工物を出荷した場合、当社の信用失墜に繋がる可能性があります。

当社は、今後とも常に品質管理体制の強化に努めてまいりますが、人材流出、培地や試薬の不良品の混入、劣化、細胞加工の過程における人為的な過失、地震や火災の災害等が発生した場合には、重大な事故に繋がる恐れもあり、当社の業績に影響を与える可能性があります。

法的規制の影響に係るリスク

当社は、事業の遂行にあたって、関連法令を含めた法令を遵守しております。主には、次に挙げる法的規制の適用を受けています。

しかしながら、新たな法律や規制ができた場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(1)「再生医療等安全性確保法」との関連

「再生医療等安全性確保法」は、再生医療等に用いられる再生医療等技術の安全性の確保及び生命倫理への配慮や医療機関が再生医療技術を用いた治療を行う場合に講じるべき措置、治療に用いる細胞組織の加工を医療機関以外が実施する場合の細胞加工物の製造の許可等の制度を定めた法律です。治療に用いる細胞加工を行う場合には、細胞培養加工施設ごとに「特定細胞加工物製造業許可」を取得する必要があります。医療機関が再生医療を行おうとする場合には、再生医療等提供計画の作成、認定再生医療等委員会における審議、厚生労働省への計画書等の提出が義務付けられています。

当社は、特定細胞加工物製造事業者許可を取得しており当社が保有する細胞培養加工施設で医療機関からの細胞加工を受託しておりますが、関係官庁の動向や当社が想定し得ない規制強化が生じた場合には、その対応のためのコストが発生する可能性があり、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(2)「医薬品医療機器等法」との関連

「医薬品医療機器等法」は、医薬品、医薬部外品、化粧品、医療機器及び再生医療等製品の品質、有効性及び安全性の確保並びにこれらの使用による保健衛生上の危害の発生及び拡大の防止のために必要な規制を行うとともに、指定薬物の規制に関する措置を講ずるほか、医療上特にその必要性が高い医薬品、医療機器及び再生医療等製品の研究開発の促進のために必要な措置を講ずることにより、保健衛生の向上を図ることを目的とした法律です。当社は、再生医療等製品製造業許可を取得しておりますが、関係官庁の動向や当社が想定し得ない規制強化が生じた場合には、その対応のためのコストが発生する可能性があり、当社の業績に影響を与える可能性があります。

研究開発の不確実性に関わるリスク

当社が事業展開する再生医療分野は、日進月歩に進化するがゆえに、継続的な研究開発活動は持続的成長にとって大変重要な役割を担っております。当社では、研究開発を通して将来に渡る企業価値向上を図るべく、研究開発を戦略的に遂行していくための体制を構築し、積極的な活動を行っております。今後は、再生医療等製品製造販売承認を取得することにより、再生医療等製品事業を細胞加工業に続く新たな収益の柱とすることを目指してまいります。

これらに必要な研究開発費は、2020年9月期249,996千円（売上高に対する比率31.9%）、2021年9月期325,718千円（同比率47.7%）、2022年9月期565,224千円（同比率89.2%）となっており、将来に渡る企業価値向上を図るための先行投資と認識しております。

しかしながら、研究開発投資に見合うだけの事業化等による研究成果が得られなかった場合や、再生医療等製品の臨床試験において必ずしも当社の期待したとおりの結果が得られるとは限らず、結果として再生医療等製品の製造販売承認が得られなかった場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

知的財産権に係るリスク

医療技術や細胞加工に密接に関わる重要な（周辺）技術については、積極的に知的財産権の出願を行い、当社の技術を適切に保護しております。

また、これら先端医療技術の中には、特許として知的財産権を獲得するよりも、ノウハウとして保有する方が事業戦略上優位であると考えられるものも少なからずあり、ノウハウについては、取引先あるいは共同研究先との秘密保持契約等で守ることにより、外部に流出しないよう厳しく管理しております。

しかしながら、以上のような対応している中においても、出願した案件が権利化できないという可能性もあり、また、権利化できた場合でも、実際にその権利を行使できない可能性や、第三者の権利に抵触している可能性もあります。

特定の取引先への依存

2022年9月期の売上高633,672千円のうち、医療法人社団混志会に対する売上は、383,259千円（売上高に占める割合60.5%）と、現時点では同医療法人に対する依存度が高い状態にあります。医療法人社団混志会は、当社と緊密かつ安定的な関係にあります。今後両者の関係が悪化した場合や、万が一同医療法人において受診患者数の減少、閉鎖等の事態に至った場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

資金調達に関する事項

当社は、2020年9月及び2021年9月に第17回及び第18回新株予約権の発行による資金調達を実施したこともあり、当事業年度末の手元資金（現金及び預金）残高は4,499,095千円となり財政基盤は安定しております。しかしながら当事業年度においては営業活動によるキャッシュ・フローがマイナスであり、今後の当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況、また金融市場の状況等によっては、資金調達が困難になる可能性があります。その場合には、再生医療等製品の開発や細胞培養加工施設等への設備投資等が計画通りに進められず、当社の事業の推進に影響が及び可能性があります。

継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、がん免疫療法市場の環境変化に伴う細胞加工業の売上急減に加え、再生医療等製品事業分野における自社製品の開発進捗に伴う支出が累増しているため、継続的に営業損失及びマイナスの営業キャッシュ・フローが発生しており、継続企業の前提に疑義を生じさせるリスクが存在しております。

しかしながら、当社は、2018年4月に開始した事業構造改革を着実に実行し、細胞加工業セグメントにおいては、細胞加工施設の統廃合等を通じて製造体制の適正化を図り、同セグメントのセグメント利益の早期黒字回復を目指しております。また、再生医療等製品事業セグメントにおいては、早期の製造販売承認の取得に向けて有望かつ可能性の高いシーズを優先して開発を進めるとともに、再生医療等製品の開発費等については資金状況を勘案の上、機動的に資金調達を実施してまいります。現状では、構造改革の着実な実行を通じた資金の確保、さらに2019年6月の第14回及び第15回、2020年7月の第16回、2020年9月の第17回並びに2021年9月の第18回新株予約権の発行による再生医療等製品開発費等の資金調達等により、安定的なキャッシュポジションを維持しており、当面の資金繰りに懸念はないものと判断しております。これらに加えて、当社における当事業年度末の資金残高の状況を総合的に検討した結

果、事業活動の継続性に疑念はなく、継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないものと判断しております。

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大については、収束時期が未だ見通せない状況にあります。当社においては、感染予防として、消毒液の設置、換気対策、従業員の検温、マスクの着用等、また、テレワークの実施など新型コロナウイルス感染症拡大防止のための措置を講じ、当社の事業推進に影響を及ぼさないように努めております。しかしながら、今後、新型コロナウイルス感染症の影響により、当社の従業員や取引先でクラスター（集団感染）が発生した場合、品川C P Fの操業の中断・遅延などにより、当社の事業運営、業績等に影響を与える可能性があります。

情報システムに関わるリスク

(1)サイバー攻撃に関するリスク

当社は、業務上、各種ITシステムを利用しておりますが、悪意をもった第三者による攻撃（サイバーアタック）により社内ネットワークやシステムの運用停止といった問題が発生する可能性があります。これらのリスクを低減するためサイバー攻撃・ウイルス感染の検知機能・監視体制や情報セキュリティインシデント対応体制の強化を図っておりますが完全に防げるとは限りません。社内ネットワークやシステムの運用停止が発生した場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(2)情報漏洩に関するリスク

当社は、従業員の個人情報に加え、取引先等の情報を含む技術・営業・その他事業に関わる機密情報を保持しております。それらの情報の保護については、社内規程の制定、従業員への教育、情報インフラの整備、業務委託先も含めた指導等の対策を実施しておりますが、情報漏洩を完全に防げるとは限りません。万が一、情報漏洩が起きた場合、当社の信用は低下し、当社の業績に影響を与える可能性があります。

大規模災害等の影響

地震、火災、台風等に加え、洪水、津波等の自然災害により、当社の事業所に大規模な損害が発生した場合、もしくは新型コロナ感染症拡大によるパンデミックが発生し、事業継続に支障が発生した場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

当社は、事業継続への影響を最小化するため、従業員の安全を確保するとともに、事業継続計画(BCP)を作成し、訓練を実施しております。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

当事業年度の期首より、「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日）等を適用しております。

詳細は、「第5 経理の状況 1 財務諸表等（1）財務諸表 注記事項(会計方針の変更)」に記載のとおりであります。

(1) 経営成績等の状況の概要

財政状態及び経営成績の状況

当事業年度（2021年10月1日から2022年9月30日まで）においては、新型コロナウイルス感染症の影響により厳しい状況が続いたものの、ワクチン接種が進み、行動制限の緩和等により、経済活動は徐々に正常化に向かっていますが、一方で、急激な円安の進行、資源・エネルギー価格の高騰等により、先行きは依然として不透明な状況にあります。

こうした状況の中、当社は、前事業年度より引き続き、「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」と「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」による法的枠組みの下、新たなビジネス展開による事業拡大に向けた取り組みを進めるとともに収益構造の改善に注力しております。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の長期化により、当社の取引先医療機関における治療患者数の回復が遅れており、依然として厳しい状況にあります。

当事業年度においては、新型コロナウイルス感染症の長期化による取引先医療機関での国内患者数及びインバウンド患者数の低迷が続き、細胞加工数の回復が限定的になったこと等により、売上高は633百万円（前期比7.2%減）となりました。損益面につきましては、売上高の減少等により、売上総利益は127百万円（前期比29.1%減）となり、研究開発費の増加等により販売費及び一般管理費は1,461百万円（前期比15.9%増）となったことにより、営業損失は1,333百万円（前期は営業損失1,080百万円）となりました。また、加工中断収入10百万円、投資事業組合運用益1百万円（前期比99.1%減）、株式交付費7百万円（前期比8.4%増）等の営業外損益により、経常損失は1,314百万円（前期は経常損失870百万円）となり、資産除去債務戻入益66百万円を特別利益に計上したこと等により、当期純損失は1,254百万円（前期は当期純損失843百万円）となりました。

報告セグメント別の業績の概況は、以下のとおりであります。

細胞加工業

細胞加工業については、細胞加工業の3つのビジネス領域（「特定細胞加工物製造業」・「バリューチェーン事業」・「CDMO事業」）の拡大に向けて積極的な活動を展開しております。当事業年度においては、バリューチェーン事業（再生医療関連サービス）の取引増加によりバリューチェーン事業の売上が拡大したものの、新型コロナウイルス感染症の長期化による取引先医療機関での国内患者数およびインバウンド患者数の低迷が続き、受託する細胞培養加工件数の回復が限定的になったこと等により、売上高は633百万円（前期比7.2%減）となり、売上高の減少に伴う利益の減少に加え、細胞培養加工に係る体制整備費用等の増加により、セグメント損失は232百万円（前期はセグメント損失132百万円）となりました。

再生医療等製品事業

再生医療等製品事業については、再生医療等製品の開発を加速し、早期の収益化を目指すとともに、国内外で行われている再生医療等製品の開発動向にも注目し、それらのパイプライン取得、拡充を視野に入れた活動を行っております。当事業年度においては、売上高は0百万円（前期比7.2%増）となり、研究開発活動の進展に伴う研究開発費の増加等により、セグメント損失は582百万円（前期はセグメント損失450百万円）となりました。

(資産)

当事業年度末の総資産は、前事業年度末に比べて700百万円増加し、6,078百万円となりました。流動資産は4,807百万円と前事業年度末に比べ402百万円増加しており、主な要因は、現金及び預金の増加403百万円です。固定資産は1,270百万円と前事業年度末に比べ297百万円増加しており、主な要因は、投資有価証券の増加319百万円、有形固定資産の減少83百万円、無形固定資産の増加54百万円によるものです。

(負債)

当事業年度末の負債は、前事業年度末に比べて91百万円増加し、566百万円となりました。流動負債は279百万円と前事業年度末に比べて4百万円増加しております。主な要因は、未払金の増加52百万円、未払法人税等の増加7百万円、賞与引当金の増加6百万円、買掛金の増加5百万円、資産除去債務の減少66百万円です。固定負債は286百万円と前事業年度末に比べて86百万円増加しており、主な要因は、繰延税金負債の増加87百万円です。

(純資産)

当事業年度末の純資産は、前事業年度末に比べて609百万円増加し、5,511百万円となりました。主な要因は、新株予約権の行使による資本金809百万円及び資本剰余金809百万円の増加、その他有価証券評価差額金261百万円の増加の一方、当期純損失計上に伴う利益剰余金1,250百万円の減少、新株予約権21百万円の減少によるものです。

この結果、自己資本比率は、前事業年度末の90.8%から90.7%となりました。

キャッシュ・フローの状況

当事業年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前事業年度末に比べ403百万円増加し、当事業年度末には4,499百万円となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動に使用した資金は1,161百万円（前期は974百万円の使用）となりました。

主な増加は、減価償却費105百万円であり、主な減少は、税引前当期純損失1,248百万円、資産除去債務戻入益66百万円です。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動によって使用した資金は20百万円（前期は344百万円の獲得）となりました。

主な収入は、投資事業組合からの分配による収入30百万円、主な支出は、短期貸付けによる支出15百万円、無形固定資産の取得による支出26百万円です。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動によって獲得した資金は1,584百万円（前期は1,082百万円の獲得）となりました。

収入は、株式の発行による収入1,590百万円であり、主な支出は、リース債務の返済による支出3百万円です。

生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

該当事項はありません。

b. 受注実績

該当事項はありません。

c. 販売実績

当事業年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	前期比(%)
細胞加工業(千円)	633,450	92.8
再生医療等製品事業(千円)	221	107.2
合計(千円)	633,672	92.8

(注) 1. 最近2事業年度における主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)		当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
	金額(千円)	割合(%)	金額(千円)	割合(%)
医療法人社団滉志会	453,823	66.4	383,259	60.5
ヤンセンファーマ株式会社	102,699	15.0	-	-
セルソース株式会社	-	-	107,727	17.0

2. 前事業年度のセルソース株式会社の販売実績及び当事業年度のヤンセンファーマ株式会社の販売実績については、当該販売実績の総販売実績に対する割合が100分の10未満であるため、記載を省略しております。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において判断したものであります。

財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

(経営成績の分析)

当社の当事業年度の売上高は633百万円(前期比49百万円減、7.2%減)となりました。

(細胞加工業)

細胞加工業の売上高は、633百万円(前期比49百万円減、7.2%減)となりました。当事業年度の売上高の減少は、新型コロナウイルス感染症の影響により、取引先医療機関でのインバウンド等の患者数の低迷が続いたことが主な要因であります。新型コロナウイルス感染症の収束の見通しは不透明であることから、既存の細胞加工に加え、新たな細胞加工の拡充やCDMOの展開等に注力し、収益の拡大を図ってまいります。

(再生医療等製品事業)

再生医療等製品事業の売上高は、0.2百万円(前期比7.2%増)となりました。再生医療等製品事業の売上高は、現時点では上市できている再生医療等製品がないため、ライセンス収入に留まっており、再生医療等製品の製造販売に向けて、研究開発投資が先行している状況にあります。

当事業年度の営業損失は1,333百万円(前期は営業損失1,080百万円)となり、前期に比べて252百万円損失が増加しました。これは、売上高の減少等により売上総利益は127百万円(前期比52百万円減、29.1%減)となったことに加え、経費の効率化等により販売費と一般管理費は減少した一方で、研究開発活動の進展に伴う研究開発費の増加等により、販売費及び一般管理費は1,461百万円(前期比199百万円増、15.9%増)となったことによるものです。その内訳は、研究開発費は565百万円(前期比239百万円増、73.5%増)、販売費は112百万円(前期比13百万円減、10.4%減)、一般管理費は783百万円(前期比26百万円減、3.3%減)となりました。

(細胞加工業)

当事業年度においては、前事業年度に引き続き、セグメント利益の計上を目指してまいりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響による売上高の減少に加え、細胞培養加工に係る体制整備費用等の増加等により、当事業年度ではセグメント損失232百万円(前期はセグメント損失132百万円)となりました。今後は、多種多様な細胞の培養・加工に対応する製造体制の強化を図り、事業の拡大を図ることにより、早期の黒字回復を目指してまいります。

(再生医療等製品事業)

当事業年度においては、研究開発活動の進展に伴う研究開発費の増加等により、セグメント損失は582百万円(前期はセグメント損失450百万円)となりました。今後は、現在進めている再生医療等製品の開発を加速し、早期の製造販売承認の獲得を目指してまいります。

(財政状態の分析)

当事業年度末の総資産は、前事業年度末に比べて700百万円増加し、6,078百万円となりました。これは主に現金及び預金の増加403百万円、投資有価証券の増加319百万円、有形固定資産の減少83百万円、無形固定資産の増加54百万円によるものです。

このうち、現金及び預金は主に第18回新株予約権の行使等により増加したものです。

当事業年度末の負債は、前事業年度末に比べて91百万円増加し、566百万円となりました。これは主に未払金の増加52百万円、未払法人税等の増加7百万円、賞与引当金の増加6百万円、買掛金の増加5百万円、資産除去債務の減少66百万円、繰延税金負債の増加87百万円によるものです。このうち、未払金は主に販売費及び一般管理費の増加によるものです。

当事業年度末の純資産は、前事業年度末に比べて609百万円増加し、5,511百万円となりました。これは主に新株予約権の行使による資本金809百万円及び資本剰余金809百万円の増加、その他有価証券評価差額金261百万円の増加の一方、当期純損失計上に伴う利益剰余金1,250百万円の減少、新株予約権21百万円の減少によるものです。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

(資金の需要)

当社の資金需要の主なものは、製造費用や販売費及び一般管理費等の営業費用による運転資金と品川C P F等への設備投資及び再生医療等製品の研究開発投資等によるものであります。

(資金の源泉及び資金の流動性)

当社の資金の源泉の主なもの、運転資金については自己資金と金融機関からの借入により、設備投資や研究開発投資については、新株予約権の発行による資金調達であります。

当事業年度末におけるリース債務による有利子負債残高は4百万円となっております。また、当事業年度末における現金及び現金同等物の残高は4,499百万円となっております。

資金の流動性については、当事業年度においては、第18回の新株予約権の行使により資金を調達しております。今後も細胞加工の新規顧客の獲得や研究開発の効率化等によりキャッシュ・フローの改善を図り、資金の流動性の確保に努めてまいります。

なお、当面の資金繰りのための資金は十分に確保していると判断しております。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社の財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この財務諸表の作成にあたっては、当事業年度における財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を与えるような見積り、予測を必要としております。当社は、過去の実績値や状況を踏まえ合理的と判断される前提に基づき、継続的に見積り、予測を行っております。そのため実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社の財務諸表の作成に当たって用いた会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定のうち、重要なものについては、「第5 経理の状況 1 財務諸表等(1)財務諸表 注記事項(重要な会計上の見積り)」に記載のとおりであります。

なお、会計上の見積りを行うに際しての新型コロナウイルス感染症の影響に関する仮定については「第5 経理の状況 1 財務諸表等(1)財務諸表 注記事項(追加情報)」に記載のとおりであります。

4【経営上の重要な契約等】

(1) 特定細胞加工物製造委託契約

契約先	契約期間	契約の概要
医療法人社団滉志会	2017年10月2日から2022年10月1日まで (双方から契約終了の申し出がない場合には、1年間延長し、以後同様。)	当社は、本契約に基づき、特定細胞加工物の製造を受託し、その対価を受け取るものであります。

(2) 技術ライセンスを受けている契約

該当事項はありません。

(3) 開発・販売ライセンスを受ける契約

契約先	契約期間	契約の概要
Ocugen, Inc. (アメリカ)	上市后10年または重要特許の期間満了までのどちらか長い期間	日本における自家細胞培養軟骨「NeoCart」に係るライセンス契約

5【研究開発活動】

当社は、がん免疫療法及び難治性疾患治療のための再生医療等製品についての基礎研究、商業化を目指した技術開発からその臨床応用まで、幅広い研究開発活動を推進しており、マイルストーンに沿った進捗が得られるように管理、運営を図っております。各事業における研究内容は次のとおりであります。

なお、当事業年度における研究開発費は565,224千円であり、2022年9月末日現在、研究開発部門スタッフは総計21名おり、これは総従業員の約16%に当たります。

(1)細胞加工業

当事業では、細胞加工に関する技術の改良や様々な再生・細胞医療技術の開発を行っております。

当事業年度においては、再生医療等製品の開発を目的とした製造工程の検討等を実施しました。

なお、当事業年度における細胞加工業に係る研究開発費は29,291千円であります。

(2)再生医療等製品事業

当事業では、当社が行っている再生医療等製品の製造販売承認に向けた研究開発・技術開発に加え、国内外の有望な技術を持つアカデミア等とのアライアンスを推進し、再生医療等製品の開発を加速し、製造販売承認の早期実現を目指しております。

2019年11月に、国立大学法人九州大学(以下、「九州大学」との間で、慢性心不全治療に用いる再生医療等製品の実用化に向けた共同研究契約を締結し、
-ガラクトシルセラミドをパルスした樹状細胞のナチュラルキラーT細胞

の活性化による慢性炎症の制御に基づく新しい慢性心不全治療薬の開発を進めており、医師主導第Ⅱ相試験の開始に向けて当社品川C P Fで進めていた治験製品製造体制の確立が完了し、治験届が提出され、治験が開始されました。

自家細胞培養軟骨「MDNT-01」（米国製品名NeoCart®）の開発に関しましては、現在NeoCart®の資産を保有しておりますOcugen社（所在地：米国ペンシルベニア州モルバーン市）は、米国での開発再開を目指して、FDAと承認申請に必要な第Ⅱ相試験プロトコルについて協議を続けていますが、当事業年度中には合意に至っておりません。Ocugen社は、「NeoCart®」による成人の膝軟骨の修復治療に関して、米国FDAよりRMAT（Regenerative Medicine Advanced Therapy）の指定を受けたことを発表しました。当社は米国での開発方針が決定された後、国内における自家細胞培養軟骨「MDNT-01」の開発方針を決定する予定です。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く状況下において、当社では、自社特許技術であるゾレドロン酸感作樹状細胞を新型コロナワクチン開発に応用できないかと考え、2020年8月に国立研究開発法人国立がん研究センター（以下、「国立がん研究センター」）と、新型コロナウイルス感染症の予防を目的としたSARS-CoV-2抗原パルス自家樹状細胞ワクチンの開発に向けた共同研究開発契約を締結し、現在非臨床試験を実施しております。

また、2019年10月に国立がん研究センターと締結いたしました、がん抗原タンパク質の1つであるHeat Shock Protein 105（HSP105）に関連した新たながん免疫療法の実用化に向けた共同研究契約に基づき、研究員を国立がん研究センターに派遣し共同研究を推進しております。

加えて、2019年10月に京都府公立大学法人京都府立医科大学と自己中和抗体産生に起因する病態を対象とした、新しいキメラ受容体（B細胞抗体受容体：BARと呼びます）を遺伝子導入した免疫細胞（BAR-T細胞）による特異的B細胞除去法の実用化に向けた共同研究契約を締結し、BAR-T細胞の開発の可能性を検討するため非臨床薬効薬理試験を実施しております。

当社は、国立大学法人大阪大学大学院医学系研究科に免疫再生制御学共同研究講座を設け免疫細胞に関する研究を行ってまいりました。その研究成果である「糖鎖修飾・代謝制御による免疫細胞の新規培養技術によるリンパ球（2-DGリンパ球）」のヒトでの安全性及び有効性を検討する臨床研究を医療法人社団混志会（以下、「混志会」）と行っております。また、本技術で培養される免疫細胞は免疫細胞療法に望ましい特徴を有しており、CAR-T細胞への応用の可能性についても検討しております。

2020年12月に混志会と、先制医療（病気の発生を未然に防ぐことを目的に、様々な背景因子等による予測・診断を踏まえ、症状や障害が起こる以前の段階から実施する医療）としての免疫細胞治療の有用性を適切に評価するために、免疫細胞投与前後で種々の免疫パラメーターがどのように変化するかを検討する臨床研究を実施しております。現在、被験者への免疫細胞投与が完了し、中間解析を行っております。今後、本共同研究で得られるがん予防、感染症予防、健康長寿に関する評価指標を活用し、先制医療における免疫細胞療法の有用性の確立に向けて研究を進める予定です。

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科二見教授が開発された血液中の自己抗体を高感度で検出できる技術、MUSCAT Assay（Multiple S-cationized antigen beads array assay）に関して、共同で医療分野、特に腫瘍免疫学分野への応用を検討しております。多種多様で個人差が大きい「がん抗原」に対する自己抗体を網羅的に測定することにより、腫瘍免疫応答の活性化を高感度に定量評価し、免疫療法の効果予測が可能な抗体検査診断薬の開発を目指し共同研究を行っております。

なお、当事業年度における再生医療等製品事業に係る研究開発費は535,932千円であります。

第3【設備の状況】

当社の設備において、ソフトウェアは重要な資産であるため、以下、有形固定資産のほか、無形固定資産のうちソフトウェア及びソフトウェア仮勘定を含めて設備の状況を記載しております。

1【設備投資等の概要】

当社は、当事業年度において76,994千円の設備投資を行いました。

細胞加工業におきましては、細胞加工用機器、医療機関用システムの開発等の投資を行っており、設備投資額は59,590千円であります。再生医療等製品事業におきましては、研究開発設備等の投資を行っており、設備投資額は4,033千円であります。その他、業務システムの開発、改修等のセグメントに区分できない設備投資額は13,371千円あります。

なお、当事業年度において重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

当社における主要な設備は、次のとおりであります。

2022年9月30日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (人)
			建物及び 構築物	リース 資産	その他	無形固定 資産	合計	
品川C P F (東京都品川区)	細胞加工業 再生医療等製 品事業 全社(共通)	細胞加工施設 及び研究施 設、事業施設	468,711	6,285	43,528	19,791	538,317	72 (14)
本社 (東京都大田区)	全社(共通)	統括事業施設	8,763	3,883	6,013	81,895	100,556	24 (4)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は工具、器具及び備品と建設仮勘定、「無形固定資産」は特許権、ソフトウェアとソフトウェア仮勘定であります。

2. 従業員数には、契約医療機関への出向者を含めております。臨時雇用者数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

(1)重要な設備の新設

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達方法	着手及び完了予定年月		完成後の 増加能力
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
品川C P F (東京都品川区)	細胞加工業 再生医療等製品 事業	再生・細胞医療 用細胞培養加工 施設	2,690	1,855	増資資金及 び自己資金	2014年1月	未定	未定

(注) 品川C P Fは、計画の見直しを行っているため完成予定時期は未定であります。

(2)重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	300,000,000
計	300,000,000

(注) 2022年12月15日開催の定時株主総会において定款の一部変更が行われ、発行可能株式総数は同日より100,000,000株増加し、400,000,000株となっております。

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2022年9月30日)	提出日現在発行数(株) (2022年12月15日)	上場金融商品取引 所名又は登録認可 金融商品取引業協 会名	内容
普通株式	211,730,423	211,730,423	東京証券取引所 グロース市場	権利内容に何ら限定の ない当社における標準 となる株式であり、単 元株式数は100株であ ります。
計	211,730,423	211,730,423	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

第18回新株予約権

	第4四半期会計期間 (2022年7月1日から 2022年9月30日まで)	第27期 (2021年10月1日から 2022年9月30日まで)
当該期間に権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数(個)	-	329,800
当該期間の権利行使に係る交付株式数(株)	-	32,980,000
当該期間の権利行使に係る平均行使価額等(円)	-	48.46
当該期間の権利行使に係る資金調達額(千円)	-	1,598,127
当該期間の末日における権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数の累計(個)	-	340,000
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の交付株式数(株)	-	34,000,000
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の平均行使価額等(円)	-	49.07
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の資金調達額(千円)	-	1,668,465

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額(千円)	資本金残高(千円)	資本準備金増減額(千円)	資本準備金残高(千円)
2017年10月1日～ 2018年9月30日 (注)1	9,912,100	118,230,423	576,572	7,362,829	576,572	1,547,359
2018年10月1日～ 2019年9月30日 (注)2	2,645,000	120,875,423	76,715	7,439,545	76,715	1,624,074
2019年10月1日～ 2020年9月30日 (注)3	39,955,000	160,830,423	1,410,132	8,849,677	1,410,132	3,034,207
2020年10月1日～ 2021年1月31日 (注)4	11,705,000	172,535,423	364,088	9,213,765	364,088	3,398,295
2021年1月31日 (注)5	-	172,535,423	4,318,250	4,895,515	3,034,207	364,088
2021年2月1日～ 2021年9月30日 (注)6	6,215,000	178,750,423	186,558	5,082,073	186,558	550,646
2021年10月1日～ 2022年9月30日 (注)7	32,980,000	211,730,423	809,946	5,892,020	809,946	1,360,593

(注)1. 第4回無担保転換社債型新株予約権付社債の株式転換、第12回新株予約権及び第13回新株予約権の行使によるものであります。

2. 第13回新株予約権及び第14回新株予約権の行使によるものであります。

3. 第14回新株予約権、第15回新株予約権、第16回新株予約権及び第17回新株予約権の行使によるものであります。

4. 第17回新株予約権の行使によるものであります。

5. 資本金及び資本準備金の減少は、2020年12月17日開催の第25回定時株主総会決議に基づく欠損填補によるものであります。

6. 第17回新株予約権及び第18回新株予約権の行使によるものであります。

7. 第18回新株予約権の行使によるものであります。

8. 2022年12月15日開催の定時株主総会において、資本金733,040千円、資本準備金1,360,593千円をそれぞれ減少し、欠損填補することを決議しております。

9. 当社は、2022年9月30日開催の当社取締役会において、2021年9月1日発行の第三者割当による第18回新株予約権(行使価格修正条項付)において調達した資金の用途の支出内容及び支出時期を変更することを決議いたしました。

2021年8月16日提出の有価証券届出書に記載した資金用途等の変更内容は以下のとおりであります。

第18回新株予約権

<変更前>

調達する資金の具体的な使途（変更箇所は下線）

具体的な使途	金額(百万円)	支出予定時期
() CDMO事業等拡大に向けた細胞培養加工施設の拡充に係る設備投資資金	736	2021年9月～2024年9月
() CDMO事業等拡大に向けた受容力拡大に伴う体制整備資金	996	2021年9月～2024年9月
() 本社運転資金	546	2021年9月～2022年8月
() 資本業務提携に伴う株式取得等に係る費用	411	2021年9月～2024年9月
合計	2,689	

<変更後>

調達する資金の具体的な使途（変更箇所は下線）

具体的な使途	金額(百万円)	支出予定時期
() CDMO事業等拡大に向けた受容力拡大に伴う体制整備資金	996	2021年9月～2024年9月
() 本社運転資金	546	2021年9月～2022年11月
() CDMO事業等拡大に向けた細胞培養加工施設の拡充に係る設備投資資金	126	2021年9月～2024年9月
合計	1,668	

上記()につきましては、既存の細胞培養加工施設において顧客情報管理に伴う情報セキュリティ強化のためのシステム導入等が必要であることに加え、受容力拡大に向けて新たな技術者を先行して獲得する必要があり、優先して資金を充当するものです。()につきましては、運転資金支出の節減・抑制に努めた結果、当初支出予定時期における支出額が想定を下回ったため、支出期間を延長するものです。()につきましては、当初想定していた受注動向と実績に乖離が生じており、現時点において既存の細胞培養加工施設の受容力を超過する可能性が低いことから、優先順位を見直すものです。

また、上記変更前()につきましては、第18回新株予約権の資金使途としておりましたが、当社株価の下落に伴い調達金額が減少したことから、本資金使途へは未充当となり、実施できていなかったために削除することといたします。上記() ()につきましては、今後、手元資金の活用（従来想定していた資金使途の変更を含む）、新たな資本による調達、またはその他の手段による資金調達についても検討を行ってまいります。

第18回新株予約権は、340,000個（34,000,000株）全てが行使完了しており、1,668百万円の資金を調達しております。2022年8月31日現在において、()72百万円、()452百万円をそれぞれ充当しており、支出していない資金1,143百万円については、実際に支出するまでの期間、銀行等の安全な金融機関において管理しております。

(5) 【所有者別状況】

2022年9月30日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	1	32	180	33	111	54,084	54,441	-
所有株式数(単元)	-	16,385	73,993	95,710	37,044	5,998	1,887,942	2,117,072	23,223
所有株式数の割合(%)	-	0.77	3.49	4.52	1.74	0.28	89.17	100.00	-

(注) 上記「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が24単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2022年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
木村佳司	千葉県浦安市	7,629,300	3.60
株式会社三星住発	新潟県新潟市西区五十嵐1の町6676-7	2,050,000	0.96
セントラル短資株式会社	東京都中央区日本橋本石町3-3-14	2,037,000	0.96
日本証券金融株式会社	東京都中央区日本橋茅場町1-2-10	1,638,500	0.77
森部鐘弘	愛知県名古屋市中区	1,400,000	0.66
S M B C 日興証券株式会社	東京都千代田区丸の内3-3-1	1,158,200	0.54
中埜昌美	愛知県半田市	1,100,000	0.51
株式会社ランドキャリア	愛知県名古屋市中区矢田2-20-5	1,005,000	0.47
崎山浩司	愛媛県今治市	900,000	0.42
猪狩恭典	福島県田村市	895,000	0.42
計	-	19,813,000	9.35

(7)【議決権の状況】
【発行済株式】

2022年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	-	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 211,707,200	2,117,072	-
単元未満株式	普通株式 23,223	-	-
発行済株式総数	211,730,423	-	-
総株主の議決権	-	2,117,072	-

(注)「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が2,400株(議決権24個)含まれております。

【自己株式等】

2022年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合 (%)
-	-	-	-	-	-
計	-	-	-	-	-

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	30	2,190
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における取得自己株式には、2022年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数及び価額は含めておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他(-)	-	-	-	-
保有自己株式数	30	-	30	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、2022年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社では、株主に対する利益還元を最重要課題の一つとして位置づけており、業績、経営基盤の強化及び将来の成長等を総合的に勘案して、利益配当の実施を検討してまいります。また、先行投資を着実に回収し、継続的な成長を果たすことで企業価値を向上し、株主の皆様の利益に貢献したいと考えております。

しかしながら当社は、これまで、配当を実施した実績はなく、当期末では累積損失が発生しています。そのため先ずは内部留保を確保して、早期の累積損失の解消に努めるとともに、再生医療等製品の製造・販売承認の取得に向けた設備投資及び研究開発投資、細胞加工業の顧客獲得に向けた設備投資及び営業活動への資金充当を優先させ、企業体質の強化を進めるとともに、事業の成長を図っていく方針であります。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

なお、当社は、「取締役会の決議により、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる」旨を定款に定めております。

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、遵法精神のもと、透明性、効率性の高い経営上の組織体制や仕組みを整備し、企業価値の最大化を図ることをコーポレート・ガバナンスの基本的な考え方としております。

それを実現するために、株主・投資家をはじめとする全てのステークホルダーと良好な関係を築き、患者や医療機関、並びに企業等に革新的な技術及びサービスを提供し続けることにより、長期的、安定的な成長を遂げていくことが重要であると考えております。

このような中で、コンプライアンス、リスクマネジメントの徹底、適時適切な情報開示、業務プロセスにおける不正や誤謬を防ぐ内部牽制の仕組み強化など、様々な施策を講じてコーポレート・ガバナンスの強化・充実に努めております。

企業統治の体制

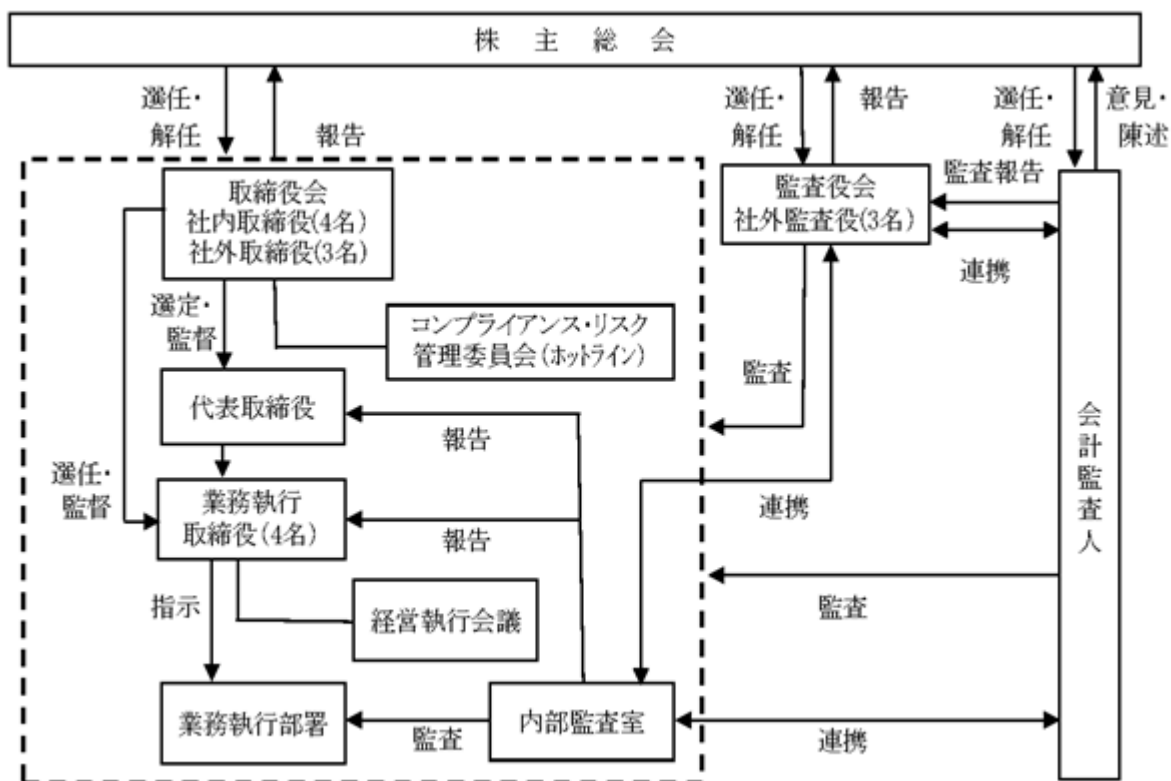
a. 企業統治の体制の概要

当社は、取締役会において経営の基本方針、法令で定められた事項、並びに経営に関する重要事項について審議決定をしております。当社の取締役会は、代表取締役である久布白兼直が議長を務め、木村佳司、落合雅三及び近藤隆重の3名の取締役、篠田丈、吉野公一郎及び市川邦英の3名の社外取締役を合わせて、計7名で構成されており、原則毎月1回の定期開催と必要に応じて臨時開催を行い、経営の意思決定を行うほか、業績の進捗状況及び業務執行状況の監督を行っております。また、取締役会を補完する機能として、業務執行取締役等が出席する経営執行会議において重要決裁事項の報告・協議・決定を行い、経営環境の変化に対応した迅速な業務執行ができる体制をとっております。なお、現在、業務執行取締役は4名であります。

また、当社は、監査役会設置会社であり、監査役会は、常勤監査役である瀧上眞次が議長を務め、片山卓朗及び長谷川明彦の3名で構成され、コーポレート・ガバナンスにおけるチェック・アンド・バランス（牽制と均衡）が適切に働くよう、監査役3名全員を社外監査役として配置しております。各監査役は、監査役会において策定された監査方針及び監査計画に基づき、取締役会などの重要な会議に出席し、取締役の業務執行状況を監督、監査しております。

一方、代表取締役の直轄組織として業務執行部門から独立した内部監査室を設置し、業務執行部門に対して厳正な内部監査を実施し、業務遂行の効率性・有効性の評価や法令及び規定等の遵守性確保を中心とした監査活動を行っております。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の模式図は次のとおりであります。



b. 企業統治の体制を採用する理由

当社は、経営の意思決定機能と、業務執行を管理監督する機能を取締役会が持つことにより、経営効率の向上と的確かつ戦略的な経営判断が可能な経営体制をとっております。さらに取締役会に対する十分な監視機能を発揮するため、社外取締役3名を選任するとともに、監査役3名全員を社外監査役としています。社外取締役は、長年にわたる専門的な見識をもとに、取締役会に対して的確な提言と監視機能を果たしています。さらに、3名の社外監査役はそれぞれの専門的見地からの的確な経営監視を実行しております。以上により、経営監視機能の客観性及び中立性が確保されており、十分に機能する体制が整っていると判断しております。

企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

当社は、内部統制システムを、取締役会及び使用人の職務執行が法令または定款等に違反しないための法令遵守体制、会社の重大な損失の発生を未然に防止するためのリスク管理体制、財務情報その他企業情報を適正かつ適時に開示するための体制などを包括した内部管理体制と捉え、その体制整備を進めることにより、企業不祥事の発生の防止を図るなど、コーポレート・ガバナンスの確立に資することを基本的な考え方としております。

法令遵守体制の整備状況につきましては、取締役会の下にコンプライアンス・リスク管理委員会を設置し、代表取締役が委員長として、リスク管理統括責任者及びコンプライアンス統括責任者を兼ねております。具体的な制度設計としては、コンプライアンスの徹底を図るため、コンプライアンス管理規程を整備し、企業行動憲章及び行動規範を定め、全社員に対してのコンプライアンス研修の実施をするなど、法令及び企業倫理の遵守徹底を推進しております。また、公益通報者保護法の下、社内のマイナス情報を吸い上げ、不正行為の防止機能の役割を担うコンプライアンスホットラインを設置しております。さらに、反社会的勢力の排除につきましては、毅然とした態度を保ち、不当・不法な要求には一切応じないことを基本方針とし、その旨を行動規範に明記し、役員及び全社員に周知徹底を図っております。

情報開示体制の整備状況につきましては、社内各部門の責任者による情報の集約・管理、及び情報管理責任者による情報の重要性・適時開示の判断を中心として、社内体制を構築しております。また、年2回の決算説明会の動画配信、四半期ごとの決算説明資料の掲載など、当社のホームページを活用したりリリース情報の速やかな開示により、株主及び投資家等との適時適切なコミュニケーションを推進しております。

情報管理体制の整備状況につきましては、文書管理規程を定め、法令に基づく文書の作成及び保管、会社の重要な意思決定、重要な業務執行に関する文書等の適正な保管管理を行っております。具体的な内容としては、株主総会議事録・取締役会議事録・監査役会議事録・経営基本規程・財務諸表等を永久保存するなど、その重要度に応じた保存期間、保存方法等を定めております。

財務報告の信頼性を確保するための財務報告に係る内部統制の整備状況につきましては、内部統制の評価範囲を定め、重要な業務プロセス及び決算・財務報告プロセスの文書化を行い、整備状況及び運用状況の評価を実施しております。

b. リスク管理体制の整備の状況

当社は、事業活動に潜在する様々な内外のリスクを全社的かつ適切に管理するため、リスク管理基本方針をリスク管理規程に定めるとともに、代表取締役を委員長としたコンプライアンス・リスク管理委員会を設置しております。コンプライアンス・リスク管理委員会においては、経営管理部がリスク管理を推進する事務局として、社内各部門の業務に関連するリスクの抽出と評価を行ったうえで優先的に管理をするリスクの特定を行い、社内各部門に対してリスクの予防、軽減、移転及び回避対策を講じるなどの平時のリスク管理活動を推進しております。

また、事業の運営に重大な影響を及ぼす恐れのある経営危機が発生した場合に対応できるように、緊急対策本部の設置体制やクライシスコミュニケーションマニュアル等の整備をすすめる一方、災害、個人情報の漏洩や各種ハラスメントなどの重要リスクについては、各管理委員会のもとで個別管理規程を定めるなど、リスクの最小化と未然防止に努めております。

さらに当社は、企業経営及び日常業務に関して複数の法律事務所等と顧問契約を締結し、業務執行上の疑義が発生した場合は、その内容に応じた各分野の専門家から適宜助言を受けられる体制をとり、戦略及び法務リスクの管理強化を図っております。

c. 責任限定契約の内容の概要

会社法第427条第1項の規定により、各社外取締役及び各社外監査役との間に損害賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償責任限度額は、法令に定める最低責任限度額としております。

d. 役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結しております。当該保険契約の被保険者の範囲は取締役、監査役、執行役員であり、保険料は全額当社が負担しております。

当該保険契約の内容の概要は、被保険者が、その職務の執行に関し責任を負うこと又は当該責任の追及に係る請求を受けることによって生ずることのある損害を当該保険契約により保険会社が填補するものであり、1年毎に契約更新しております。次回更新時には同内容での更新を予定しております。なお、当該保険契約では、補填する額について限度額を設けることにより、被保険者による職務の執行の適正性が損なわれないようにするための措置を講じております。

e. 取締役の定数

当社の取締役は、15名以内とする旨定款に定めております。

f. 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、株主総会において、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、出席した当該株主の議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

g. 取締役会で決議することができる株主総会決議事項

i) 取締役及び監査役の責任免除

当社は、取締役及び監査役がその期待される役割を十分に発揮できるように、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議によって、取締役（取締役であった者も含む。）及び監査役（監査役であった者も含む。）の会社法第423条第1項の責任を、法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。

) 自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することを目的とするものであります。

) 中間配当の決定機関

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

h. 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う旨定款に定めております。

これは、株主総会の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【 役員の状況】

役員一覧

男性10名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長	木村 佳司	1952年 3月15日生	1992年 9月 H O Y A (株) 本 社 市 場 開 発 促 進 部 課 長 1994年10月 (株) コ ア メ デ ィ カ ル 専 務 取 締 役 1995年10月 当 社 設 立 代 表 取 締 役 社 長 2002年 9月 代 表 取 締 役 C E O 2011年10月 代 表 取 締 役 社 長 2013年10月 取 締 役 会 長 2014年10月 代 表 取 締 役 会 長 兼 社 長 2015年10月 代 表 取 締 役 会 長 兼 社 長 兼 事 業 本 部 長 2018年10月 代 表 取 締 役 会 長 兼 社 長 2018年12月 代 表 取 締 役 社 長 2022年 4月 代 表 取 締 役 会 長 (現 任)	(注) 3	7,629,300
代表取締役 社長	久布白 兼直	1960年 7月17日生	1983年 4月 三 菱 化 成 工 業 (株) (現 三 菱 ケ ミ カ ル (株)) 入 社 1990年 4月 同 社 東 京 支 社 医 薬 部 門 1993年10月 同 社 医 薬 本 部 医 薬 事 業 部 1998年10月 東 京 田 辺 製 薬 (株) (現 田 辺 三 菱 製 薬 (株)) 学 術 情 報 部 出 向 1999年10月 三 菱 東 京 製 薬 (株) (現 田 辺 三 菱 製 薬 (株)) 医 薬 事 業 本 部 学 術 情 報 部 グ ル ー プ マ ネ ー ジ ャ ー 2001年10月 三 菱 ウ ェ ル フ ェ ー マ (株) (現 田 辺 三 菱 製 薬 (株)) 営 業 本 部 営 業 企 画 部 グ ル ー プ マ ネ ー ジ ャ ー 2005年 4月 同 社 営 業 本 部 関 西 圏 エ リ ア マ ー ケ テ ィ ン グ 部 長 2007年10月 田 辺 三 菱 製 薬 (株) 営 業 本 部 営 業 推 進 部 担 当 部 長 2008年 4月 同 社 営 業 本 部 製 品 育 成 第 1 部 長 2010年 4月 同 社 営 業 本 部 製 品 情 報 部 長 2015年10月 同 社 営 業 本 部 東 京 支 店 長 2016年 4月 同 社 理 事 営 業 本 部 東 京 支 店 長 2017年 4月 同 社 グ ル ー プ 理 事、吉 富 薬 品 (株) 代 表 取 締 役 社 長 2018年 4月 同 社 グ ル ー プ 理 事、天 津 田 辺 製 薬 有 限 公 司 総 経 理 2020年12月 当 社 取 締 役 2021年 4月 取 締 役 副 社 長 2022年 4月 代 表 取 締 役 社 長 (現 任)	(注) 3	27,600

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 経営管理部長	落合 雅三	1974年9月22日生	1997年4月 千代田生命保険(相)(現ジブラルタ生命保険(株))入社 2001年2月 丸紅テレコム(株)(現M×モバイルリング(株))入社 2004年9月 当社入社 2006年10月 経営企画部経営企画グループマネージャー 2007年12月 (株)東京ベイ・メディカルフロンティア取締役 2011年10月 (医)混志会 管理本部長 2018年1月 当社 経営管理部長 2018年12月 取締役経営管理部長(現任)	(注)3	71,600
取締役 細胞加工事業部長	近藤 隆重	1975年4月22日生	2000年6月 アイン・エンジニアリング(株)入社 2003年4月 当社入社 2008年1月 臨床開発部臨床開発グループマネージャー 2014年10月 T R推進部学術開発室長 2015年4月 経営戦略部長 2018年12月 取締役経営戦略部長 2020年4月 取締役細胞加工事業部長(現任)	(注)3	66,400
取締役	篠田 丈	1961年8月1日生	1985年4月 (株)小松製作所入社 1989年5月 日興証券(株)(現S M B C日興証券(株))入社 1998年12月 ドレスナー・クラインオートベンソン証券会社入社 エクイティファイナンス・アジア本部長 2000年9月 アイエヌジー・ベアリング証券会社入社 エクイティファイナンス・アジアオセアニア本部長 2003年3月 T & R(有)(現(株)T & Rホールディングス)代表取締役(現任) 2003年6月 B N Pパリバ証券(株)入社 株式・派生商品本部長 2007年4月 (株)アリストゴラ(現(株)アリストゴラ・アドバイザーズ)取締役 2011年3月 同社 代表取締役会長(現任) 2013年9月 (株)アリストゴラ・フィナンシャル・サービス 取締役 2014年10月 (株)Noah's Planning 社外取締役 当社 社外取締役(現任) 2016年1月 (株)アリストゴラ・フィナンシャル・サービス 会長(現任) 2017年8月 アリストゴラ・インターナショナルPte.Ltd.(シンガポール法人)取締役会長 2018年1月 同社 取締役(現任) 2018年11月 アリストゴラ・アセットマネジメント Pte. Ltd.(シンガポール法人)取締役(現任) 2020年1月 Aristagora VC Israel GP Ltd.(ケイマン法人)取締役(現任) 2020年12月 (株)ニチリョク 取締役 2022年6月 同社 取締役会長(現任)	(注)3	130,300

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	吉野 公一郎	1949年3月25日生	1974年4月 鐘紡(株)入社 1987年7月 同社 薬品研究所合成研究グループ長 1991年9月 同社 ガン研究所第一研究グループ長 1998年4月 同社 創薬研究所資源探索研究部長 1999年4月 日本オルガノン(株)(現MSD(株))入社 医薬研究所長 2003年4月 カルナバイオサイエンス(株)設立 代表取締役社長(現任) 2018年12月 当社 社外取締役(現任) クリングルファーマ(株) 社外取締役(現任)	(注)3	100,000
取締役	市川 邦英	1944年7月29日生	1970年4月 山之内製薬(株)(現アステラス製薬(株))入社 研究・開発部門 1994年8月 同社 医薬営業本部 1998年6月 同社 取締役 1999年6月 同社 取締役営業本部長 2002年6月 同社 常務取締役 2003年6月 同社 専務取締役 2005年4月 アステラス製薬(株) 専務取締役営業本部長 2008年9月 シミック(株)(現シミックホールディングス(株))入社 2010年12月 (株)インジェックス・ジャパン設立 代表取締役 2013年5月 シミックホールディングス(株)子会社、(株)オーファンパシフィック 代表取締役社長 2013年10月 シミックホールディングス(株)代表取締役副会長、メディバルホールディングス(株) 顧問 2017年7月 木村情報技術(株) 顧問 2019年4月 (株)クオンタムオペレーション 顧問(現任) 2020年10月 (株)サイジェクト設立 代表取締役(現任) 2022年12月 当社 社外取締役(現任)	(注)3	-
常勤監査役	瀧上 眞次	1952年9月17日生	1980年4月 東西貿易(株)入社 1987年1月 日興證券(株)(現SMB C日興証券(株))入社 2000年1月 ゼネラルコンサルティング(株)入社 2002年5月 エムディエス(株) 取締役 2003年10月 (株)コネット 取締役 2003年12月 シミック(株)入社 社長室長 2007年1月 ダイ・デザイン社(米国法人)日本代表(現任) 2012年9月 (株)チャーチルコンサルタンツ 顧問 2014年12月 当社 常勤社外監査役(現任) 2020年12月 (株)ニチリョク 社外取締役(現任)	(注)4	3,000
監査役	片山 卓朗	1950年10月8日生	1982年4月 弁護士登録(34期) 黒田法律事務所入所 1984年4月 独立後、法律事務所設立 2018年5月 奥・片山・佐藤法律事務所(現任) 2018年12月 当社 社外監査役(現任)	(注)4	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役	長谷川 明彦	1951年7月27日生	1978年4月 鐘紡(株)入社 1981年12月 同社 製剤開発研究部グループリーダー 1988年9月 日本シエーリング(株)(現バイエル薬品(株)) 医薬品研究開発本部研究部化学グループ 1989年7月 同社 医薬品研究開発本部研究部 医薬品研究グループ新薬開発室長 1995年4月 同社 研究開発本部研究部医薬品研究グループリーダー 2004年8月 同社 安全性・薬制部門長 2005年1月 同社 執行役員信頼性保証部門長 総括製造販売責任者 2007年7月 日本アルコン(株) 品質保証部門長 2008年2月 同社 信頼性保証部門長総括製造販売責任者兼品質保証部門長 2011年12月 アストラゼネカ(株) 信頼性保証室長総括製造販売責任者 2015年4月 バクスアルタ(株)(現武田薬品工業(株)) 総括製造販売責任者 2020年12月 当社 社外監査役(現任)	(注)5	-
計					8,028,200

- (注) 1. 取締役篠田丈氏、吉野公一郎氏及び市川邦英氏は、社外取締役であります。
2. 監査役瀧上眞次氏、片山卓朗氏及び長谷川明彦氏は、社外監査役であります。
3. 2022年12月15日開催の定時株主総会の終結の時から2年間であります。
4. 2022年12月15日開催の定時株主総会の終結の時から4年間であります。
5. 2020年12月17日開催の定時株主総会の終結の時から4年間であります。
6. 所有株式数には、役員持株会名義のものは含めておりません。
7. 当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
岡崎 久美子	1980年4月14日生	2008年12月 新日本有限責任監査法人(現EY新日本有限責任監査法人)入所 2013年9月 公認会計士登録 2017年8月 岡崎久美子公認会計士事務所設立 同事務所代表(現任) 税理士法人YFPクレア入所(現任) 2017年10月 税理士登録 2021年9月 (株)エム・エイチ・グループ 社外監査役(現任)	-

社外役員の状況

当社の社外取締役は3名、社外監査役は3名であります。

社外取締役篠田丈氏は、当社の取引金融機関の一つである日興証券(株)(現SMB C日興証券(株))の出身であり、また、過去当社との間で経営コンサルティング等を目的とする成功報酬型の業務委託契約を締結していた(株)アリス タゴラ・アドバイザーズの代表取締役を兼務しております。これまでに当社は同社からコンサルティング等のサービスの提供を受けていますが、その対価の額は僅少であります。社外取締役吉野公一郎氏及び市川邦英氏は、当社との間に特別の利害関係はありません。社外取締役については、取締役会などにおける重要な業務執行に係る意思決定プロセス等において当社の業務執行を行う経営陣から独立した中立的な立場から経営判断をしていただくために、幅広い、かつ奥行きのある豊富な経験と高い見識を有する方を選任しております。また、社外取締役吉野公一郎氏を東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

社外監査役瀧上眞次氏は、当社の取引金融機関の一つである日興証券(株)(現SMB C日興証券(株))の出身であります。社外監査役片山卓朗氏は、過去当社との間で法律相談業務等の顧問契約を締結しておりましたが、既に終了しており、現在においては当社との間に特別の利害関係はありません。社外監査役長谷川明彦氏は、当社との間に特別の利害関係はありません。社外監査役については、十分な専門性を持ち、各々の優れた見識・経験、かつ、客観的立場から社外監査役としての職務を適切に遂行していただける方を選任しております。また、社外監査役瀧上眞次氏を東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

また、社外取締役篠田丈氏及び吉野公一郎氏、社外監査役瀧上眞次氏は、「役員一覧」に記載しているとおり当社株式を所有しております。

当社において、社外取締役又は社外監査役を選任するための独立性について特段の定めはありませんが、専門的な知見に基づく客観的かつ適切な監督または監査といった機能及び役割が期待され、東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準等を参考に、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことを基本的な考え方として、選任しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会等において監査役監査、会計監査等の報告を受け、独立した立場から必要に応じて経営に対する意見を述べ、取締役の業務執行状況の監督強化に努めております。

社外監査役は、監査役3名全員が社外監査役であり、定期的に監査役会において内部監査室より報告を受け、情報共有、協議等を行い、連携を図っており、会計監査人とも、定期的にミーティングの場を設け、直接、監査計画、監査手続きの概要等の説明を受けるとともに、監査結果の報告を受け、情報共有、意見交換等を行っております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当社の監査役監査の状況は、常勤監査役1名を含む社外監査役3名の体制で監査を行い、毎月開催される取締役会に出席し、取締役会ならびに取締役の意思決定、業務執行に関する十分な監視機能を果たしております。

当事業年度において、監査役会は月1回開催しており、各監査役の出席状況は以下のとおりです。

氏名	開催回数	出席回数
瀧上 眞次	12	12
片山 卓朗	12	12
長谷川 明彦	12	12

監査役及び監査役会は、会計監査人との間で双方の立場からの年度監査体制、監査計画及び監査内容について報告及び協議を行っております。常勤監査役は、日常的な監視、重要な社内会議への出席、各部門との面談等を行い、監査役会等で他の監査役と意見交換、情報共有を図っております。

内部監査の状況

内部監査室を代表取締役の直轄組織として設置し、専任者1名が、他の業務執行部門から独立した立場で組織の内部管理体制の適正性及び効率性を客観的に評価し、改善提案やフォローアップを実施しております。

内部監査室は、監査役及び監査役会に対して年度監査体制及び年度監査計画を報告し、その内容について協議を行い、監査の実施状況については、その都度社外監査役である常勤監査役に報告するとともに、内部統制部門と意見交換を行い、相互の連携を深め、監査の実効性及び効率性の向上を図っております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

普賢監査法人

b. 継続監査期間

1年

c. 業務を執行した公認会計士

嶋田 両児

高橋 弘

d. 監査業務に係る補助者の構成

会計監査業務に係る補助者の構成は、公認会計士4名、その他1名であります。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社は、会計監査人の選定及び評価に際しては、会計監査人の独立性、品質管理体制、監査計画の妥当性、監査の実施状況及び監査結果の相当性を検討した上で、会計監査人を総合的に評価し、選解任や不再任の可否等について判断しております。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役会は、監査法人の品質管理体制や監査チームの独立性・専門性、監査の実施状況、その適切性及び妥当性などの評価を行っております。

g. 監査法人の異動

当社の監査法人は次のとおり異動しております。

前事業年度 EY新日本有限責任監査法人

当事業年度 普賢監査法人

なお、臨時報告書に記載した事項は次のとおりであります。

(1) 当該異動に係る監査公認会計士等の名称

選任する監査公認会計士等の名称

普賢監査法人

退任する監査公認会計士等の名称

EY新日本有限責任監査法人

(2) 当該異動の年月日
2021年12月16日

(3) 退任する監査公認会計士等が監査公認会計士等となった年月日
2001年9月28日

(4) 退任する監査公認会計士等が直近3年間に作成した監査報告書等における意見等に関する事項
該当事項はありません。

(5) 当該異動の決定又は当該異動に至った理由及び経緯
EY新日本有限責任監査法人は、2021年12月16日開催予定の第26回定時株主総会終結の時をもって任期満了となります。監査役会は、当社の事業規模に適した監査対応と監査費用の相当性について考慮した結果、その後任として新たに普賢監査法人を会計監査人として選任するものであります。

(6) 上記(5)の理由及び経緯に対する意見
退任する監査公認会計士等の意見
特段の意見はない旨の回答を得ております。
監査役会の意見
監査役会の検討経緯と結果に則った内容であり、妥当であると判断しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

前事業年度		当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)	監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)
24,800	-	18,000	-

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬(a.を除く)
該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容
該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針
当社では、監査公認会計士等の監査計画・監査内容、監査日数等を勘案した上で、監査役会の事前の同意を得て、適切に監査報酬額を決定しております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由
取締役が提案した会計監査人に対する報酬等に対して、当社の監査役会が会社法第399条第1項の同意をした理由は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況や報酬見積りの算出根拠等を確認し、検討した結果、相当であると判断したためであります。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、2022年11月18日開催の取締役会において、取締役の個人別の報酬等の内容にかかる決定方針を決議しております。

取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針は次のとおりです。

1. 基本方針

当社の取締役の報酬は、中長期の企業価値向上を考慮し、個々の取締役の報酬の決定に際しては各職責を踏まえた適正な水準とすることを基本方針とし、基本報酬である月例の固定報酬と非金銭報酬（株式報酬）で構成する。

2. 取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関する事項

(1) 月例固定報酬の額等の決定に関する方針

個人別の報酬額については、取締役会決議に基づき、代表取締役社長がその具体的内容の決定について委任を受けるものとし、代表取締役社長は、その具体的内容の決定に際しては、各取締役の役位、職責、当社業績及び業績への貢献度、目標達成度、在任年数、他社水準、従業員給与の水準等を総合的に勘案するものとする。

(2) 非金銭報酬（株式報酬）の額又は数等の決定に関する方針

非金銭報酬である株式報酬については、譲渡制限付株式（1年間継続して当社グループの取締役、監査役、執行役員又は使用人の地位にあったことを条件として、取締役等からの退任時に譲渡制限を解除する）を割り当てることとし、各取締役の役位、職責、当社業績及び業績への貢献度、目標達成度、在任年数、他社水準等を総合的に勘案して株式報酬に係る払込みに用いるために付与する金銭報酬の額を取締役会において決定の上、取締役会が定めた日に割り当てる（原則として年1回とする）こととする。

(3) 各報酬の割合の決定に関する方針

月例固定報酬と非金銭報酬（株式報酬）に係る金銭報酬の割合は概ね9：1となるようにする。

(4) 取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関するその他の事項

取締役会は、代表取締役社長による上記（1）の決定及び取締役会による（2）の決定が適切に行われるよう、各取締役の報酬等の内容について、代表取締役社長及び代表取締役会長、並びに社外取締役から構成される任意の報酬委員会に諮問するものとし、代表取締役社長及び取締役会は、同報酬委員会の答申の内容を最大限尊重し、報酬等の具体的内容を決定するものとする。

(5) 役員の報酬額の総限度額は、2003年12月24日開催の第8回定時株主総会において以下のとおり決議しております。

- ・ 取締役の報酬の範囲限度額：年額500,000千円（使用人分給与は含まず）
- ・ 監査役の報酬の範囲限度額：年額100,000千円

取締役会は、当事業年度に係る取締役等の個人別の報酬等について、代表取締役社長から決定方針等の説明を受け、また報酬委員会の答申内容を確認することなどにより、報酬等の内容の決定方法及び決定された報酬等の内容が取締役会で決議された決定方針と整合していることや、報酬委員会からの答申が尊重されていることを確認しており、当該決定方針に沿うものであると判断しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)		対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	
取締役 (社外取締役を除く。)	65,200	65,200	-	4
監査役 (社外監査役を除く。)	-	-	-	-
社外役員	18,800	18,800	-	5

(注) 当事業年度末の役員の人数は、取締役(社外取締役を除く。)4名及び社外役員5名であります。

役員ごとの報酬などの総額等

報酬等の総額が1億円以上である者が存在していないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式について、以下のとおり区分して管理しています。

a. 保有目的が純投資目的である投資株式

株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的としています。

b. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

当社が投資先企業との取引関係等の強化を図り、当社の企業価値を高めることを目的としています。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、投資先との関係維持・強化、取引円滑化及び当該純投資目的以外の目的である投資によって得られる当社の利益と投資額や保有に伴うリスク等を総合的に勘案して、その投資の可否を判断しております。保有の可否及び保有数の適否について、取締役会等で検証を行い、保有状況に合理性が認められない場合は、適宜売却を行っております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	3	11,800
非上場株式以外の株式	1	149,009

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	1	149,009	非上場株式の上場

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(千円)
非上場株式	1	-
非上場株式以外の株式	-	-

c . 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
TC BioPharm (Holdings) PLC	3,675,000	-	(保有目的)ライセンス契約を締結して おり、同社との関係性の維持を図るため (定量的な保有効果)記載が困難である ため記載していません (株式数が増加した理由)非上場株式の 上場	無
	149,009	-		

保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1. 財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1963年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度（2021年10月1日から2022年9月30日まで）の財務諸表について、普賢監査法人により監査を受けております。

3. 連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、連結財務諸表を作成していません。

4. 財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握する体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、また、定期的に監査法人等の主催するセミナーに参加する等により、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備しております。

1【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年9月30日)	当事業年度 (2022年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	4,095,689	4,499,095
売掛金	1,219,342	1,170,996
仕掛品	16,511	15,732
原材料及び貯蔵品	25,360	33,787
前渡金	50	956
前払費用	26,429	25,243
その他	21,470	61,659
流動資産合計	4,404,854	4,807,470
固定資産		
有形固定資産		
建物(純額)	557,397	477,475
工具、器具及び備品(純額)	28,413	28,059
リース資産(純額)	13,050	10,169
建設仮勘定	21,633	21,482
有形固定資産合計	2,620,494	2,537,186
無形固定資産		
特許権	-	19,791
ソフトウェア	8,690	24,406
ソフトウェア仮勘定	38,705	57,489
無形固定資産合計	47,395	101,687
投資その他の資産		
投資有価証券	165,704	485,357
長期貸付金	541,250	536,250
破産更生債権等	28,078	26,878
差入保証金	76,248	77,269
保険積立金	62,974	66,163
その他	-	2,926
貸倒引当金	569,328	563,128
投資その他の資産合計	304,928	631,717
固定資産合計	972,818	1,270,591
資産合計	5,377,672	6,078,061

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年9月30日)	当事業年度 (2022年9月30日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	40,912	46,141
リース債務	3,390	1,992
未払金	79,391	131,839
未払費用	7,847	7,954
未払法人税等	20,900	28,746
預り金	5,585	5,621
賞与引当金	51,007	57,016
資産除去債務	66,000	-
流動負債合計	275,036	279,313
固定負債		
リース債務	4,300	2,307
繰延税金負債	40,904	128,091
資産除去債務	154,200	156,160
その他	502	262
固定負債合計	199,908	286,822
負債合計	474,945	566,136
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,082,073	5,892,020
資本剰余金		
資本準備金	550,646	1,360,593
資本剰余金合計	550,646	1,360,593
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	843,396	2,093,633
利益剰余金合計	843,396	2,093,633
自己株式	-	2
株主資本合計	4,789,323	5,158,978
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	91,636	352,946
評価・換算差額等合計	91,636	352,946
新株予約権	21,766	-
純資産合計	4,902,726	5,511,924
負債純資産合計	5,377,672	6,078,061

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
売上高	1,683,033	1,633,672
売上原価	502,617	505,748
売上総利益	180,415	127,923
販売費及び一般管理費	2,312,261,064	2,314,461,023
営業損失()	1,080,648	1,333,099
営業外収益		
受取利息	6,834	6,790
投資事業組合運用益	206,155	1,766
貸倒引当金戻入額	5,000	6,200
加工中断収入	-	10,225
その他	3,538	1,724
営業外収益合計	221,528	26,707
営業外費用		
支払利息	289	98
株式交付費	6,908	7,487
社債発行費等	4,341	-
為替差損	67	283
その他	-	0
営業外費用合計	11,606	7,870
経常損失()	870,726	1,314,262
特別利益		
固定資産売却益	48,267	-
新株予約権戻入益	24,432	-
資産除去債務戻入益	-	66,000
特別利益合計	32,699	66,000
特別損失		
投資有価証券評価損	-	527
特別損失合計	-	527
税引前当期純損失()	838,026	1,248,790
法人税、住民税及び事業税	5,456	5,352
法人税等調整額	87	51
法人税等合計	5,369	5,301
当期純損失()	843,396	1,254,092

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)		当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
材料費		76,925	15.4	70,607	13.8
労務費	1	216,397	43.2	229,742	44.7
経費	1	207,644	41.4	213,113	41.5
当期総製造費用		500,967	100.0	513,464	100.0
期首仕掛品棚卸高	2	14,632		12,633	
他勘定振替高	3	4,494		4,616	
期末仕掛品棚卸高		16,511		15,732	
当期製品製造原価		494,594		505,748	
期首商品棚卸高		8,205		-	
商品仕入高		-		-	
他勘定受入高	4	127		-	
他勘定振替高	5	310		-	
期末商品棚卸高		-		-	
当期売上原価		502,617		505,748	

(原価計算の方法)

個別原価計算によっております。

1. 主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
賞与引当金繰入額(千円)	16,405	16,597
外注費(千円)	6,317	8,916
消耗品費(千円)	36,320	34,940
保守修繕費(千円)	21,237	27,566
減価償却費(千円)	42,813	41,717
地代家賃(千円)	37,801	38,644

2. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を当事業年度の期首から適用し、当事業年度の期首より前に当該会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を当事業年度の期首の繰越利益剰余金に加減しております。これに伴い、当事業年度の期首仕掛品棚卸高は当該会計方針適用前の16,511千円から12,633千円に減少しております。

3. 内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
研究開発費(千円)	4,494	4,616

4. 内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
材料(千円)	127	-

5. 内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度	当事業年度
販売促進費(千円)	227	-
福利厚生費(千円)	82	-

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金	利益剰余金合計	
				繰越利益剰余金		
当期首残高	8,849,677	3,034,207	3,034,207	7,352,457	7,352,457	4,531,427
当期変動額						
新株の発行	550,646	550,646	550,646			1,101,292
当期純損失（ ）				843,396	843,396	843,396
欠損填補	4,318,250	3,034,207	3,034,207	7,352,457	7,352,457	-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	3,767,603	2,483,561	2,483,561	6,509,060	6,509,060	257,895
当期末残高	5,082,073	550,646	550,646	843,396	843,396	4,789,323

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計		
当期首残高	229,253	229,253	45,895	4,806,576
当期変動額				
新株の発行				1,101,292
当期純損失（ ）				843,396
欠損填補				-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	137,616	137,616	24,128	161,745
当期変動額合計	137,616	137,616	24,128	96,150
当期末残高	91,636	91,636	21,766	4,902,726

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

(単位：千円)

	株主資本						自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金				
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計			
当期首残高	5,082,073	550,646	550,646	843,396	843,396	-	4,789,323	
会計方針の変更による累積的影響額				3,855	3,855		3,855	
会計方針の変更を反映した当期首残高	5,082,073	550,646	550,646	839,541	839,541	-	4,793,178	
当期変動額								
新株の発行	809,946	809,946	809,946				1,619,893	
当期純損失（ ）				1,254,092	1,254,092		1,254,092	
自己株式の取得						2	2	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	809,946	809,946	809,946	1,254,092	1,254,092	2	365,799	
当期末残高	5,892,020	1,360,593	1,360,593	2,093,633	2,093,633	2	5,158,978	

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計		
当期首残高	91,636	91,636	21,766	4,902,726
会計方針の変更による累積的影響額				3,855
会計方針の変更を反映した当期首残高	91,636	91,636	21,766	4,906,582
当期変動額				
新株の発行				1,619,893
当期純損失（ ）				1,254,092
自己株式の取得				2
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	261,309	261,309	21,766	239,542
当期変動額合計	261,309	261,309	21,766	605,342
当期末残高	352,946	352,946	-	5,511,924

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純損失()	838,026	1,248,790
減価償却費	114,877	105,859
賞与引当金の増減額(は減少)	18,548	6,008
貸倒引当金の増減額(は減少)	10,916	6,200
受取利息及び受取配当金	6,834	6,790
支払利息	289	98
為替差損益(は益)	0	0
有形固定資産売却損益(は益)	8,267	-
投資有価証券評価損益(は益)	-	527
投資事業組合運用損益(は益)	206,155	1,766
株式交付費	6,908	7,487
社債発行費等	4,341	-
新株予約権戻入益	24,432	-
資産除去債務戻入益	-	66,000
売上債権の増減額(は増加)	7,983	48,346
棚卸資産の増減額(は増加)	8,182	7,647
破産更生債権等の増減額(は増加)	28,078	1,200
仕入債務の増減額(は減少)	6,904	5,229
未払金の増減額(は減少)	17,053	18,307
未払又は未収消費税等の増減額	15,987	26,610
その他	22,185	8,284
小計	975,797	1,162,453
利息及び配当金の受取額	6,844	6,801
利息の支払額	289	98
法人税等の支払額	5,454	5,450
営業活動によるキャッシュ・フロー	974,695	1,161,202
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	21,439	13,822
無形固定資産の取得による支出	12,732	26,709
有形固定資産の売却による収入	8,687	-
短期貸付けによる支出	-	15,030
短期貸付金の回収による収入	-	1,234
長期貸付金の回収による収入	5,000	5,000
投資事業組合からの分配による収入	362,620	30,122
その他	2,110	1,020
投資活動によるキャッシュ・フロー	344,245	20,227
財務活動によるキャッシュ・フロー		
株式の発行による収入	1,072,140	1,590,639
新株予約権の発行による収入	18,954	-
新株予約権の発行による支出	-	2,411
自己株式の取得による支出	-	2
リース債務の返済による支出	8,770	3,390
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,082,324	1,584,835
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	0
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	451,874	403,406
現金及び現金同等物の期首残高	3,643,814	4,095,689
現金及び現金同等物の期末残高	4,095,689	4,499,095

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合の出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書等を基礎とし、その持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 商品

移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(2) 原材料

移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(3) 仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備については定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 8～18年

工具、器具及び備品 4～15年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいております。

(3) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

4. 繰延資産の処理方法

(1) 株式交付費

支出時に全額費用として処理しております。

(2) 社債発行費等

支出時に全額費用として処理しております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えて、支給見込額の当期負担額を計上しております。

6. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点(収益を認識する通常の時点)は以下のとおりであります。

細胞加工業

細胞加工業においては、医療機関で採取された患者様の細胞から、医療機関の委託に基づき、再生・細胞医療で用いる治療用の細胞(特定細胞加工物)の製造を行っております。この特定細胞加工物の出荷が可能と判定された時点で収益を認識しております。

再生医療等製品事業

再生医療等製品事業においては、当社の知的財産に関するライセンスを実施許諾することによりロイヤリティ収入が生じております。ロイヤリティ収入は、ライセンス先の企業の売上高に基づいて生じるものであり、ライセンス先の企業から実施報告書を受領した時点で収益を認識しております。

7. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクを負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)

固定資産の減損

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：千円)

	前事業年度	当事業年度
有形固定資産	620,494	537,186
無形固定資産	47,395	101,687

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

当社は、原則として、報告セグメントごとに資産のグルーピングを行っており、遊休資産等については個別資産ごとにグルーピングを行っております。これらの資産グループに減損の兆候があり、回収可能価額が帳簿価額を下回った場合、資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、減損損失を計上いたします。

回収可能価額は正味売却価額により評価しております。正味売却価額は、外部の専門家による評価に基づき、対象資産の売却を前提とした公正価値から売却に要する費用を控除して算定された価額としております。

当事業年度末は、回収可能価額が資産の帳簿価額を上回っているため、固定資産の減損損失の計上は不要と判断いたしました。

主要な仮定

正味売却価額の算出に用いた主要な仮定は、資産の再調達価額、経済的耐用年数、残価率等であります。

翌事業年度の財務諸表に与える影響

減損の兆候の把握、減損損失の認識及び測定にあたっては慎重に検討を行っておりますが、専門家評価による正味売却価額が低下するなど回収可能価額が変動した場合、減損損失の計上が必要となる可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これによる主な変更点として、細胞加工業における製造受託の一部については、従来、出荷基準により収益を認識しておりましたが、財又はサービスを顧客に移転し当該履行義務が充足された時点で収益を認識する方法に変更しております。また、特定細胞加工物の製造受託の中断が発生した場合に売上高として認識する会計処理方法を営業外収益として認識する会計処理方法へ変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の繰越利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当事業年度の売上高は17,274千円、売上原価は3,069千円、売上総利益は14,205千円減少し、営業損失は14,205千円、経常損失及び税引前当期純損失は3,979千円増加しております。また、繰越利益剰余金の当期首残高は3,855千円増加しております。

当事業年度のキャッシュ・フロー計算書は、税引前当期純損失が3,979千円増加し、棚卸資産の増減額が3,878千円減少しております。

当事業年度の期首の純資産に累積的影響額が反映されたことにより、株主資本等変動計算書の繰越利益剰余金の遡及適用後の期首残高は3,855千円増加しております。

なお、1株当たり情報に与える影響は当該箇所に記載しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「売掛金」の一部は、当事業年度より「その他」に含めて表示することといたしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法による組替えを行っておりません。

また、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度に係る「収益認識関係」注記については記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、当事業年度の財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係注記」において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うことといたしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2019年7月4日)第7-4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前事業年度に係るものについては記載しておりません。

(未適用の会計基準等)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」

(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準委員会 企業会計基準適用指針第31号)の2021年6月17日の改正は、2019年7月4日の公表時において、「投資信託の時価の算定」に関する検討には、関係者との協議等に一定の期間が必要と考えられるため、また、「貸借対照表に持分相当額を純額で計上する組合等への出資」の時価の注記についても、一定の検討を要するため、「時価の算定に関する会計基準」公表後、概ね1年をかけて検討を行うこととされていたものが、改正され、公表されたものです。

(2) 適用予定日

2023年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(損益計算書)

前事業年度まで区分掲記して表示しておりました営業外収益の「設備賃貸料」(当事業年度の金額は783千円)は、金額的重要性が乏しくなったため、当事業年度より、「その他」に含めて表示しております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「設備賃貸料」に表示していた1,071千円は、「その他」として組み替えております。

(追加情報)

(新型コロナウイルス感染症の影響について)

新型コロナウイルス感染症の影響により、海外からの渡航制限等による取引先医療機関でのインバウンドの患者数の低迷等が続き、当事業年度の売上が減少しております。本感染症の収束の時期は未だ見通せず不透明な状況にあります。当社は、今後1年間にわたり当影響が継続すると仮定して、継続企業の前提に係る将来の資金繰りの検討において、将来キャッシュ・フローの見積りを行っております。

(貸借対照表関係)

1. 売掛金のうち、顧客との契約から生じた債権の金額は、次のとおりであります。

	当事業年度 (2022年9月30日)
売掛金	170,996千円

2. 有形固定資産の減価償却累計額

	前事業年度 (2021年9月30日)	当事業年度 (2022年9月30日)
有形固定資産の減価償却累計額	1,334,748千円	1,285,286千円

(損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。
顧客との契約から生じる収益の金額は、次のとおりであります。

	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
顧客との契約から生じる収益	633,672千円

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度10%、当事業年度8%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度90%、当事業年度92%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
給与手当	216,137千円	189,843千円
賞与引当金繰入額	23,231	23,729
減価償却費	44,963	37,487
研究開発費	325,718	565,224
支払手数料	189,110	201,936
貸倒引当金繰入額	5,916	-

3 一般管理費に含まれる研究開発費の総額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
	325,718千円	565,224千円

4 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
工具、器具及び備品	8,267千円	- 千円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当事業年度 期首株式数(株)	当事業年度 増加株式数(株)	当事業年度 減少株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)	160,830,423	17,920,000	-	178,750,423
合計	160,830,423	17,920,000	-	178,750,423

(注) 普通株式の株式数の増加17,920,000株は、第17回新株予約権の行使16,900,000株及び第18回新株予約権の行使1,020,000株によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権 の目的となる 株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当事業年度末 残高 (千円)
			当事業年度 期首	当事業年度 増加	当事業年度 減少	当事業年度 末	
提出会社	第17回新株予約権 (注)1	普通株式	16,900,000	-	16,900,000	-	-
	第18回新株予約権 (注)1,2	普通株式	-	34,000,000	1,020,000	32,980,000	21,766
	ストックオプションと しての新株予約権	-	-	-	-	-	-
合計	-	-	16,900,000	34,000,000	17,920,000	32,980,000	21,766

(注) 1. 第17回新株予約権及び第18回新株予約権の当事業年度減少は、新株予約権の行使によるものであります。

2. 第18回新株予約権の当事業年度増加は、新株予約権の発行によるものであります。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度 期首株式数(株)	当事業年度 増加株式数(株)	当事業年度 減少株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)1	178,750,423	32,980,000	-	211,730,423
合計	178,750,423	32,980,000	-	211,730,423
自己株式				
普通株式(注)2	-	30	-	30
合計	-	30	-	30

(注) 1. 普通株式の株式数の増加は、第18回新株予約権の行使によるものであります。

2. 自己株式の株式数の増加は、単元未満株式の買取り請求によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権 の目的となる 株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当事業年度末 残高 (千円)
			当事業年度 期首	当事業年度 増加	当事業年度 減少	当事業年度 末	
	第18回新株予約権 (注)	普通株式	32,980,000	-	32,980,000	-	-
	ストックオプションと しての新株予約権	-	-	-	-	-	-
合計	-	-	32,980,000	-	32,980,000	-	-

(注) 第18回新株予約権の当事業年度減少は、新株予約権の行使によるものであります。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
現金及び預金勘定	4,095,689千円	4,499,095千円
現金及び現金同等物	4,095,689	4,499,095

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

(1) 所有権移転ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主として、細胞培養加工施設における建物(建物附属設備)であります。

リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「3. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(2) 所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主として、情報システムに関する工具、器具及び備品であります。

リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「3. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年9月30日)	当事業年度 (2022年9月30日)
1年内	12,333	7,393
1年超	7,393	-
合計	19,726	7,393

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、事業計画に照らして、必要な資金については、金融機関からの借入による調達または、社債等の発行により資本市場から調達しております。一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用しております。デリバティブは、主に為替変動リスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わない方針であります。当事業年度においては利用していません。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である売掛金及び破産更生債権等は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、取引先ごとの期日管理、残高管理を行うとともに、定期的に主要取引先の信用状況を確認しております。

投資有価証券は、市場価格の変動や発行体の信用リスクに晒されておりますが、主に業務上の関係を有する企業等の株式及び投資事業組合出資であり、定期的にその保有の妥当性を検証しております。

短期貸付金及び長期貸付金は、貸付先に対する信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、貸付先ごとの期日管理、残高管理を行うとともに、定期的に主要貸付先の信用状況を確認しております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

(4) 信用リスクの集中

当事業年度の決算日現在における営業債権のうち、74.1%が特定の大口顧客に対するものであります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前事業年度（2021年9月30日）

	貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 長期貸付金	541,250		
貸倒引当金(3)	541,250		
	-	-	-
(2) 破産更生債権等	28,078		
貸倒引当金(3)	28,078		
	-	-	-
資産計	-	-	-

(1) 「現金及び預金」については、現金であること、預金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、また「売掛金」についても、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	貸借対照表計上額(千円)
その他有価証券	
非上場株式	12,328
投資事業組合出資金	153,376

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象としておりません。

(3) 個別に計上している貸倒引当金を控除しております。

当事業年度（2022年9月30日）

	貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
投資有価証券	149,009	149,009	-
長期貸付金	536,250		
貸倒引当金(3)	536,250		
	-	-	-
破産更生債権等	26,878		
貸倒引当金(3)	26,878		
	-	-	-
資産計	149,009	149,009	-

- (1) 「現金及び預金」については、現金であること、預金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、また「売掛金」及び「短期貸付金」についても、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。
- (2) 市場価格のない株式等は、上表には含めておりません。当該金融商品の貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位：千円)

区分	貸借対照表計上額(千円)
その他有価証券	
非上場株式	11,800
投資事業組合出資金	324,548

- (3) 個別に計上している貸倒引当金を控除しております。

(注) 金銭債権の決算日後の償還予定額

前事業年度(2021年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	4,095,689	-	-	-
売掛金	219,342	-	-	-
長期貸付金	5,000	20,000	516,250	-
合計	4,320,031	20,000	516,250	-

(注) 破産更生債権等については、償還予定額が見込めないため記載しておりません。

当事業年度(2022年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	4,499,095	-	-	-
売掛金	170,996	-	-	-
短期貸付金	13,796	-	-	-
長期貸付金	5,000	531,250	-	-
合計	4,688,887	531,250	-	-

(注) 破産更生債権等については、償還予定額が見込めないため記載しておりません。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：

観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：

観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：

観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価
時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で貸借対照表に計上している金融商品

当事業年度(2022年9月30日)

区分	時価(千円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 其他有価証券 株式	149,009	-	-	149,009
資産計	149,009	-	-	149,009

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

相場価格を用いて評価しております。活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

(2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当事業年度(2022年9月30日)

区分	時価(千円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期貸付金	-	-	-	-
破産更生債権等	-	-	-	-
資産計	-	-	-	-

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

長期貸付金

時価は、一定の期間ごとに分類し、与信管理上の信用リスク区分ごとに、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

破産更生債権等

回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定し、時価は決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額により算定しており、観察できないインプットである貸倒見積高等による影響額が重要であるため、レベル3の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. 其他有価証券

前事業年度(2021年9月30日)

非上場株式(貸借対照表計上額 12,328千円)及び投資事業組合出資金(貸借対照表計上額 153,376千円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度(2022年9月30日)

種類	貸借対照表 計上額(千円)	取得原価(千円)	差額(千円)

貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	149,009	0	149,009
合計		149,009	0	149,009

(注) 非上場株式(貸借対照表計上額 11,800千円)及び投資事業組合出資金(貸借対照表計上額 324,548千円)については、市場価格のない株式等であるため、記載しておりません。

2. 減損処理を行った有価証券

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

当事業年度において、投資有価証券(その他有価証券で市場価格のない株式等)について527千円減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30~50%程度下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

また、非上場株式については、期末における実質価格が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30~50%程度下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定拠出年金制度を採用しております。

2. 退職給付費用に関する事項

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
確定拠出年金掛金(千円)	4,850	5,355

(ストック・オプション等関係)

権利不行使による失効により利益として計上した金額

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
新株予約権戻入益(千円)	24,432	-

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年9月30日)	当事業年度 (2022年9月30日)
繰延税金資産		
賞与引当金損金算入限度超過額	15,608千円	17,447千円
貸倒引当金損金算入限度超過額	174,214	172,317
減価償却損金算入限度超過額	243,348	196,951
減損損失	3,382	3,262
一括償却資産損金算入限度超過額	105	249
繰延資産損金算入限度超過額	530	1,184
未払事業税	4,725	7,158
未払事業所税	685	1,157
棚卸資産評価損	5,862	4,322
有価証券評価損	29,551	29,712
資産除去債務	67,381	47,786
税務上の繰越欠損金(注)2	3,613,599	3,976,931
その他	128	2,996
繰延税金資産小計	4,159,123	4,461,477
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)2	3,613,599	3,976,931
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	545,024	484,096
評価性引当額小計(注)1	4,158,623	4,461,028
繰延税金資産合計	500	449
繰延税金負債		
建物(資産除去費用)	1,000	898
その他有価証券評価差額金	40,404	127,642
繰延税金負債合計	41,404	128,540
繰延税金資産(負債)の純額	40,904	128,091

(注)1. 評価性引当額の変動の主な内容は、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額の増加、減価償却超過額及び資産除去債務に係る評価性引当額の減少であります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前事業年度(2021年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金()	79,118	281,162	538,958	431,402	557,524	1,725,432	3,613,599
評価性引当額	79,118	281,162	538,958	431,402	557,524	1,725,432	3,613,599
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当事業年度(2022年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金()	281,162	538,958	431,402	557,524	513,230	1,654,652	3,976,931
評価性引当額	281,162	538,958	431,402	557,524	513,230	1,654,652	3,976,931
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因
となった主要な項目別の内訳

前事業年度及び当事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(資産除去債務関係)

(1) 当該資産除去債務の概要

事業所の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等であります。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間は建物の法定耐用年数または不動産賃貸借契約の契約期間を勘案して見積り、割引率は1.299%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
期首残高	218,266千円	220,200千円
有形固定資産の取得に伴う増加額	-	-
見積りの変更による増加額	-	-
時の経過による調整額	1,934	1,959
資産除去債務の履行による減少額	-	-
資産除去債務の履行義務消滅による減少額	-	66,000
期末残高	220,200	156,160

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「(セグメント情報等)セグメント情報 3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報」に記載のとおりであります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「(重要な会計方針) 6. 収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当事業年度末において存在する顧客との契約から翌事業年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

契約資産及び契約負債の残高等

(単位:千円)

	当事業年度
	期末残高
顧客との契約から生じた債権	170,996
契約資産	-
契約負債	-

残存履行義務に配分した取引価格

当社は、当初に予定される顧客との契約期間が1年以内であるため、残存履行義務に配分した取引価格の総額及び収益の認識が見込まれる期間の記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、カテゴリーごとの区分管理をしており、「細胞加工業」及び「再生医療等製品事業」の2つを報告セグメントとしております。

「細胞加工業」は、医療機関向けの特定細胞加工物の製造をはじめ、企業、大学、研究機関等からの臨床用、治験用の細胞加工の受託及び細胞培養加工施設の運営受託を含めたそれらの関連サービスを主に従事しております。「再生医療等製品事業」は、再生医療等製品の製造・販売承認の取得のための研究開発を主に従事しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「(重要な会計方針)」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

「(会計方針の変更)」に記載のとおり、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を当事業年度の期首から適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の測定方法を同様に変更しております。

当該変更により、従来の方法に比べて、当事業年度の「細胞加工業」の売上高が17,274千円減少し、営業損失が14,205千円増加しております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

(単位:千円)

	報告セグメント			調整額 (注)1	財務諸表計上額 (注)2
	細胞加工業	再生医療等 製品事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	682,826	206	683,033	-	683,033
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-
計	682,826	206	683,033	-	683,033
セグメント損失()	132,286	450,997	583,283	497,365	1,080,648
セグメント資産	666,248	157,285	823,534	4,554,138	5,377,672
その他の項目					
減価償却費	58,211	33,816	92,027	22,849	114,877
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	17,706	7,086	24,792	7,943	32,736

(注)1. 調整額は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント損失()の調整額 497,365千円は、全社費用であります。全社費用は、報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
- (2) セグメント資産の調整額4,554,138千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。
- (3) 減価償却費の調整額22,849千円は、全社費用であります。全社費用は、報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額7,943千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。

2. セグメント損失()は、財務諸表の営業損失と調整を行っております。

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

（単位：千円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	財務諸表計上額 (注) 2
	細胞加工業	再生医療等 製品事業	計		
売上高					
顧客との契約から生じる収益	633,450	221	633,672	-	633,672
外部顧客への売上高	633,450	221	633,672	-	633,672
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-
計	633,450	221	633,672	-	633,672
セグメント損失（ ）	232,822	582,433	815,256	517,843	1,333,099
セグメント資産	643,150	146,950	790,101	5,287,960	6,078,061
その他の項目					
減価償却費	56,498	27,761	84,259	21,600	105,859
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	59,590	4,033	63,623	13,371	76,994

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント損失（ ）の調整額 517,843千円は、全社費用であります。全社費用は、報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
- (2) セグメント資産の調整額5,287,960千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。
- (3) 減価償却費の調整額21,600千円は、全社費用であります。全社費用は、報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額13,371千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。

2. セグメント損失（ ）は、財務諸表の営業損失と調整を行っております。

【関連情報】

前事業年度（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：千円）

顧客の氏名又は名称	売上高	関連するセグメント名
医療法人社団混志会	453,823	細胞加工業
ヤンセンファーマ株式会社	102,699	細胞加工業

当事業年度（自 2021年10月1日 至 2022年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の氏名又は名称	売上高	関連するセグメント名
医療法人社団混志会	383,259	細胞加工業
セルソース株式会社	107,727	細胞加工業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

前事業年度(自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)

関連当事者との間における重要な取引がないため、記載を省略しております。

当事業年度(自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)

関連当事者との間における重要な取引がないため、記載を省略しております。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
1株当たり純資産額 27.31円	1株当たり純資産額 26.03円
1株当たり当期純損失 () 4.88円	1株当たり当期純損失 () 6.33円
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。	なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

(注) 1. (会計方針の変更)に記載のとおり、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を適用し、「収益認識に関する会計基準」第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っております。この結果、当事業年度の1株当たり純資産額及び1株当たり当期純損失に与える影響は軽微であります。

2. 1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年10月1日 至 2021年9月30日)	当事業年度 (自 2021年10月1日 至 2022年9月30日)
1株当たり当期純損失		
当期純損失 () (千円)	843,396	1,254,092
普通株主に帰属しない金額 (千円)	-	-
普通株式に係る当期純損失 () (千円)	843,396	1,254,092
普通株式の期中平均株式数 (株)	172,664,409	198,069,652
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	新株予約権1種類(新株予約権の数329,800個、普通株式32,980,000株)。	-

(重要な後発事象)

(資本金及び資本準備金の額の減少並びに剰余金の処分)

当社は、2022年12月15日開催の第27回定時株主総会において資本金の額の減少及び資本準備金の額の減少並びに剰余金の処分を行うことを決議いたしました。

1. 資本金及び資本準備金の額の減少並びに剰余金の処分の目的

当社は、過年度及び第27期事業年度において当期純損失を計上し、2,093,633,368円の繰越利益剰余金の欠損を計上するに至っております。つきましては、現在生じております利益剰余金欠損額を解消し、財務体質の健全化を図ることを目的として、会社法第447条第1項及び第448条第1項の規定に基づく資本金及び資本準備金の額の減少並びに会社法第452条の規定に基づく剰余金の処分を行うこととしました。

2. 資本金及び資本準備金の額の減少の内容

(1) 減少する資本金の額

資本金の額5,892,020,841円のうち、733,040,168円を減少し、5,158,980,673円とし、減少する資本金の額の全額を、その他資本剰余金に振り替えます。

(2) 減少する資本準備金の額

資本準備金の額1,360,593,200円を全額減少し、減少後の資本準備金の額を0円とし、減少する資本準備金の額の全額を、その他資本剰余金に振り替えます。

3. 資本金及び資本準備金の額の減少の方法

払戻を行わない無償減資とし、発行済株式総数の変更は行わず、資本金及び資本準備金の額のみを減少いたします。資本金及び資本準備金の額を減少し、全額をその他資本剰余金へ振り替えます。

4. 剰余金の処分の内容

会社法第452条の規定に基づき、上記の効力が生じた後のその他資本剰余金2,093,633,368円全額を繰越利益剰余金に振り替え、欠損填補に充ていたします。これにより繰越利益剰余金の額は0円となります。

- (1) 減少する剰余金の項目及びその額
その他資本剰余金 2,093,633,368円
- (2) 増加する剰余金の項目及びその額
繰越利益剰余金 2,093,633,368円

5. 日程

(1) 取締役会決議日	2022年11月18日
(2) 株主総会決議日	2022年12月15日
(3) 債権者異議申述公告日	2022年12月16日(予定)
(4) 債権者異議申述最終期日	2023年1月16日(予定)
(5) 効力発生日	2023年1月31日(予定)

6. その他の重要な事項

本件は、「純資産の部」における科目間の振り替えであり、当社の純資産の額の変動はなく、業績に与える影響はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価償却累計額又は償却累計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末残高(千円)
有形固定資産							
建物	1,496,519	2,840	137,656	1,361,703	884,228	82,762	477,475
機械及び装置	56,981	-	-	56,981	56,981	-	-
工具、器具及び備品	352,806	12,703	6,276	359,233	331,173	13,056	28,059
リース資産	27,301	-	4,229	23,071	12,902	2,880	10,169
建設仮勘定	21,633	-	150	21,482	-	-	21,482
有形固定資産計	1,955,242	15,543	148,312	1,822,472	1,285,286	98,700	537,186
無形固定資産							
特許権	7,541	20,000	-	27,541	7,750	208	19,791
商標権	625	-	-	625	625	-	-
ソフトウェア	695,105	22,667	-	717,773	693,366	6,951	24,406
ソフトウェア仮勘定	38,705	33,008	14,224	57,489	-	-	57,489
無形固定資産計	741,977	75,676	14,224	803,428	701,741	7,159	101,687
長期前払費用	642,978	-	-	642,978	642,978	-	-

(注) 当期減少額のうち主なものは次のとおりであります。

建物	旧本社事務所内装及び付属設備一式	137,656 千円
----	------------------	------------

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	-	-	-	-
1年以内に返済予定の長期借入金	-	-	-	-
1年以内に返済予定のリース債務	3,390	1,992	1.57	
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	4,300	2,307	1.76	2023年～2025年
その他有利子負債	-	-	-	-
計	7,691	4,300	-	-

(注) 1. 平均利率については、期末リース債務残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
リース債務	1,526	781	-	-

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	569,328	-	-	6,200	563,128
賞与引当金	51,007	57,016	51,007	-	57,016

(注) 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、貸倒懸念債権の回収によるもの1,200千円、長期貸付金の回収によるもの5,000千円であります。

【資産除去債務明細表】

本明細表に記載すべき事項が財務諸表等規則第8条の28に規定する注記事項として記載されているため、資産除去債務明細表の記載を省略しております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

資産の部

イ．現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	117
預金	
普通預金	4,498,977
小計	4,499,095
合計	4,499,095

ロ．売掛金

(イ) 相手先別内訳

相手先	金額(千円)
医療法人社団滉志会	126,689
国立大学法人金沢大学	15,429
セルソース株式会社	9,491
ヤンセンファーマ株式会社	9,408
一般社団法人志鴻会 銀座鳳凰クリニック	4,668
その他	5,307
合計	170,996

(ロ) 売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (千円)	当期発生高 (千円)	当期回収高 (千円)	当期末残高 (千円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A) + (B)} \times 100$	$\frac{(A) + (D)}{2} - \frac{(B)}{365}$
219,342	697,969	746,316	170,996	81.4	102.1

ハ．仕掛品

品目	金額(千円)
細胞加工物	15,732
合計	15,732

ニ．原材料及び貯蔵品

品目	金額(千円)
原材料	
C P材料	33,787
合計	33,787

ホ．投資有価証券

相手先	金額(千円)
その他有価証券	
株式	160,809
投資事業組合出資金	324,548
合計	485,357

ヘ．長期貸付金

相手先	金額(千円)
医療法人社団澁志会	536,250
合計	536,250

負債の部

イ．買掛金

相手先	金額(千円)
ニプロ株式会社	9,613
株式会社池田理化	8,270
株式会社バイオテック・ラボ	5,623
岩井化学薬品株式会社	3,655
ダイダン株式会社	2,619
その他	16,360
合計	46,141

(3)【その他】

当事業年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当事業年度
売上高(千円)	172,854	318,089	469,785	633,672
税引前四半期(当期)純損失 ()(千円)	340,792	676,225	984,688	1,248,790
四半期(当期)純損失() (千円)	342,144	678,928	988,743	1,254,092
1株当たり四半期(当期) 純損失()(円)	1.88	3.63	5.11	6.33

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純損失 ()(円)	1.88	1.75	1.50	1.25

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	10月1日から9月30日まで
定時株主総会	12月中
基準日	9月30日
剰余金の配当の基準日	3月31日 9月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号 株式会社アイ・アール ジャパン 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号 株式会社アイ・アール ジャパン
取次所	-
買取手数料	当社の株式及び新株予約権の取り扱いに関する手数料は、無料とする。 株主が証券会社等または機構に対して支払う手数料は、株主の負担とする。
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL https://www.medinet-inc.co.jp/
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することはできない旨、定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当及び募集新株予約権の割当を受ける権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第26期）（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日） 2021年12月16日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

事業年度（第26期）（自 2020年10月1日 至 2021年9月30日） 2021年12月16日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第27期第1四半期）（自 2021年10月1日 至 2021年12月31日） 2022年2月14日関東財務局長に提出

（第27期第2四半期）（自 2022年1月1日 至 2022年3月31日） 2022年5月13日関東財務局長に提出

（第27期第3四半期）（自 2022年4月1日 至 2022年6月30日） 2022年8月12日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2021年12月21日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（定時株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2022年12月15日

株式会社メディネット

取締役会 御中

普 賢 監 査 法 人

東 京 都 千 代 田 区

指定社員
業務執行社員 公認会計士 嶋田 両児

指定社員
業務執行社員 公認会計士 高橋 弘

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社メディネットの2021年10月1日から2022年9月30日までの第27期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社メディネットの2022年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

継続企業の前提	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、過年度より重要な営業損失及び営業キャッシュ・フローのマイナスが継続しており、翌事業年度も重要な営業損失及び営業キャッシュ・フローのマイナスを計上する可能性が高いことから、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在している。</p> <p>会社は、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況を識別しているものの、事業構造改革の着実な実行を通じた資金の確保と、新株予約権の発行による資金調達等により安定的なキャッシュポジションを維持しており、当面の資金繰りに懸念はないものと判断し、継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないと判断している。</p> <p>期末日の翌日から1年間における資金計画及びその前提となる年度予算の策定には、新株予約権に係る収入は反映されていない。ここで、年度予算に基づく資金計画における重要な仮定は、新型コロナウイルス感染症の収束時期を含め、主要顧客への売上予測である。</p> <p>資金計画における重要な仮定は不確実性を伴い経営者による判断を必要とすることから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項と判断した。</p>	<p>当監査法人は、継続企業の前提に関する重要な不確実性の有無についての経営者による判断の妥当性を評価するため、主に以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年度予算の前提となっている新型コロナウイルス感染症の収束の見通しについて経営者等へ年度を通じて質問を実施した。 ・ 過年度の予算及び資金計画について、実績との乖離要因を分析し、予算及び資金計画の信頼性を検討した。 ・ 契約書等との突合、経営者等への年度を通じた質問、取締役会議事録及び経営執行会議議事録の閲覧を実施し、売上予測が確度の高い取引を前提としているかについて検討した。 ・ 売上予測について、直近月次までの実績と資金計画で見込まれている売上を比較し、売上予測の達成可能性を検討した。 ・ 主要顧客について、経営者等へ年度を通じて質問し、翌事業年度の経営状況等について検討を行った。 ・ 会社の期末日における預金残高について、残高確認により実在性を検討した。 ・ 期末日後1ヶ月の現預金残高について、実績と資金計画における予測残高とを比較し、資金計画の信頼性を検討した。 ・ 上記手続の検討結果を踏まえ、経営者が作成した資金計画に一定の不確実性を織り込んだ資金繰りを独自に見積もり、不確実性を踏まえた上で継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められるか否かについて検討した。

その他の事項

会社の2021年9月30日をもって終了した前事業年度の財務諸表は、前任監査人によって監査されている。前任監査人は、当該財務諸表に対して2021年12月16日付けで無限定適正意見を表明している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、財務諸表及びその監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社メディネットの2022年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社メディネットが2022年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- () 1 . 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 . X B R L データは監査の対象には含まれていません。